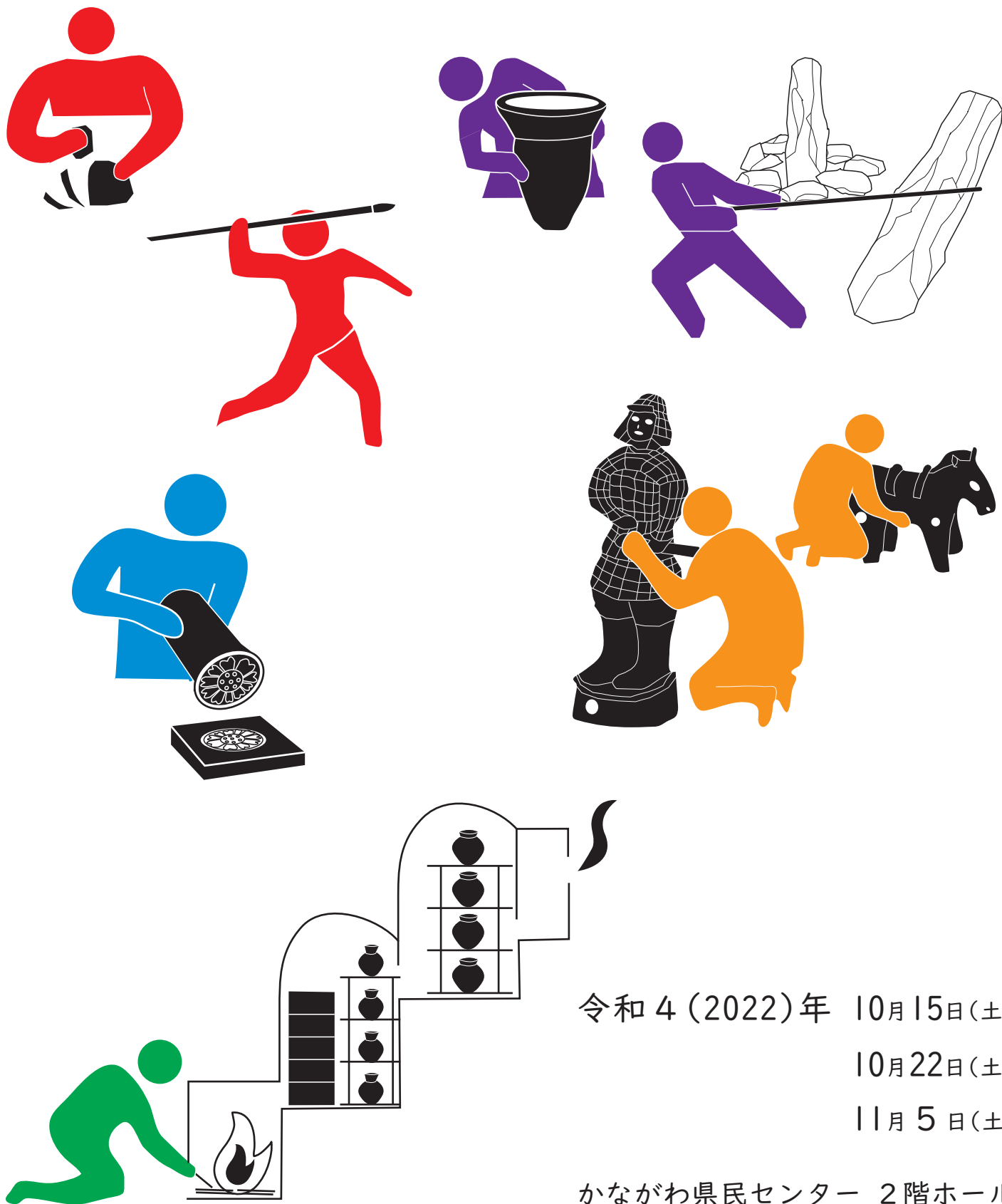


令和4年度 考古学ゼミナール

# 「技術」から過去をさぐる



令和4(2022)年 10月15日(土)

10月22日(土)

11月5日(土)

かながわ県民センター 2階ホール



# 講師紹介

## ◆阿部 昭典(あべ あきのり) 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

(専門/研究テーマ) 先史考古学(縄文時代)・縄文時代における社会変動の研究/縄文社会を明らかにするために、集落構造、環状列石などの大規模構築物、住居形態、土器編年、土器器種、儀器などの研究から総合的に検討し、社会とその変動プロセスや、これらの背景・要因を考察する。

最近の研究は、中期末葉における環状列石の出現期の研究に加えて、房総半島における住居形態と地域間交流の研究、早期末から前期前葉を中心とする繊維土器の研究を行っている。

(著書・論文等)2008『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション、2013「土偶の美—その形と心」『別冊太陽 縄文の力』平凡社、2015『縄文の儀器と世界観』知泉書館、2016「縄文時代における注口付浅鉢の成立過程と煮沸具化の意義」『考古学研究』第63巻第3号(共著)、2021「環状列石の出現に関する研究(3)」『縄文時代』第32号

## ◆塚田 良道(つかだ よしみち) 大正大学文学部歴史学科 教授、同大学院文学研究科長

(専門/研究テーマ) 考古学・博物館学/おもに埴輪と壁画を対象として、古墳時代の造形と図像の意義について研究。

(著書・論文等)2015『埴輪を知ると古代日本人が見えてくる』洋泉社、2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣、2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会(共著)、2014『乳房の文化論』乳房文化研究会 淡交社(共著)、2010『よくわかる考古学』ミネルヴァ書房(共著)

## ◆渡辺 文彦(わたなべ たけひこ) 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 教授

(専門/研究テーマ) 先史考古学・歴史考古学/生物分布境界域「下北半島」における更新世人類集団の行動様式に関する学際的研究

(著書・論文等)2018「尻労安部洞窟出土台形石器の所属年代についての再検討」『東北日本の旧石器時代』六一書房、2015『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟 1-2001～2012年度発掘調査報告書』六一書房(編著)、2015「石器は海峡を越えたか—本州最北端出土旧石器の系譜に関する一試論—」『史学』84巻1～4合併号 三田史学会、2012「日本列島旧石器時代における洞穴・岩陰利用の可能性について」『奈良文化財研究所創立60周年記念論文集 文化財論叢Ⅳ』国立文化財機構奈良文化財研究所

## ◆余語 琢磨(よご たくま) 早稲田大学人間科学学術院 准教授

(専門/研究テーマ) 考古学・文化人類学の融合領域で、民族(民俗)考古学や実験考古学を中心とする方法により、東南アジア(とくにインドネシア)の土器作りや、日本の古代～近代の窯業を中心に研究。

研究テーマは「技術文化論」。人間の生活を支える物質世界を創造してきた「技術」という工学的でプラグマティックな手段や知識の体系の解明と、それを応用して「ものづくり」を行い製作物を「価値」づけながら「使用(消費)」していく社会文化的な活動の、歴史的な相互作用に関心がある。

(著書・論文等)(京焼に関するもの)2021「石黒宗麿と“京窯”—京都蛇ヶ谷・八瀬における創作活動と生活」『生活学論叢』38、2022「インバウンドとコロナにゆらぐ伝統工芸と観光地—京焼および京都五条坂を事例として」『COVID-19の現状と展望—生活学からの提言』日本生活学会

## ◆眞保 昌弘(しんぼ まさひろ) 国士舘大学文学部 教授

(専門/研究テーマ) 歴史考古学/寺院官衙出土の古瓦からみる律令国家形成期の東国

(著書・論文等)2018『日本考古学・最前線』日本考古学協会編 雄山閣(共著)、2018『古瓦の考古学』考古調査ハンドブック ニューサイエンス社(共著)、2015『古代国家形成期の東国』同成社、2013『東国の古代官衙』東国古代遺跡研究会編 高志書房(共著)、2013『日本の金銀山遺跡』高志書房(共著)、2012『古代社会と地域間交流Ⅱ』国士舘大学考古学会編六一書房(共著)、2011『古墳時代毛野の実像』季刊考古学(別冊17) 雄山閣(共著)、2008『侍塚古墳と那須国造碑』同成社、2008『近世の好古家たち—光圀・君平・貞信・種信—』國學院大學日本文化研究所編 雄山閣(共著)

令和4年度 考古学ゼミナール

# 「技術」から過去をさぐる

●日 程(各講の後に質疑・休憩)

10月15日(土)

13:00～13:05 開講式

13:05～14:35 第1講

15:00～16:30 第2講

10月22日(土)

13:00～14:30 第3講

15:00～16:30 第4講

11月5日(土)

14:00～16:00 第5講

16:15～16:30 修了式

●会 場 かながわ県民センター 2階ホール  
(横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2)

---

## 要旨集 目次

- ◆第1講◆ 「縄文人の技術－縄文土器と構築物にみる技－」 . . . . . 1  
千葉大学大学院人文科学研究院 教授 阿部 昭典
- ◆第2講◆ 「はにわの造形と技術－人物埴輪を中心に－」 . . . . . 9  
大正大学文学部 教授 塚田 良道
- ◆第3講◆ 「洞穴遺跡が明らかにする旧石器時代の狩猟技術」 . . . . . 17  
慶應義塾大学文学部 教授 渡辺丈彦
- ◆第4講◆ 「京式登り窯のフレキシビリティ  
－近世・近現代京焼の多様性と職人の技術・生活－」 . . . . . 25  
早稲田大学人間科学学術院 准教授 余語 琢磨
- ◆第5講◆ 「東国古瓦の文様と技術－神奈川県域を中心として－」 . . . . . 35  
国土館大学文学部 教授 眞保 昌弘

# 縄文人の技術

## －縄文土器と構築物にみる技－

千葉大学大学院人文科学研究院 教授 阿部 昭典

### 1. はじめに

縄文時代における「技術」については、主に土器や石器などの道具の製作技術研究は多くの蓄積がある。その一方で、土器製作の実態（たとえば、誰がいつ製作したのか）や土器の情報がどのように広範囲に広がるのかといった研究はさほど進んでいない。さらに、遺構研究は全般的に低調であるとともに、竪穴住居などの建物や環状列石などの構築物の造営技術の解明はほとんど進展していない。この背景として、土器研究への偏重に加えて、竪穴住居などの上屋構造や内部構造が分解されて残らないため構造復元と構築技術の研究は非常に難しいからである。今回は、縄文土器における製作技術について「優劣」など幾つかの視点から検討するとともに、竪穴住居と環状列石の構築技術についてお話ししたい。

### 2. 縄文土器にみる技術の変化について

縄文土器は一万年以上続くと考えられるが、当然ながら形や文様だけでなく、技術的变化も認められる。一方で、縄文土器のなかには、同一時期においても製作技術の優劣が認められ、土器研究のなかでも何となく認識されてきた。幾つかの視点で縄文土器の技術についてみていきたい。

#### 1) 繊維土器の意義（第1図）

早期後半から前期前半期にかけて、繊維土器と呼ばれる、胎土に植物繊維を混和した土器が作られる（第1図1～4）。草創期前葉の隆起線文土器でも、胎土に繊維を混和する例が見られるが、太平洋側の地域に偏るようである。また早期後葉～前期中葉にかけて、再び胎土に繊維を混和する技法が広範囲に広まる。これらは、なぜ土器胎土に植物を混和したのか、明確には分かっていない。

これまでの研究では、土器の軽量化のためや、粘土に粘り気を出して積み上げやすくするためなどの理由が指摘されている。さらに、混和された植物が何の種類か、またどの部位なのかについても、土器圧痕分析などで検討されているが（丑野 2012、など）、いまだ明確な植物の種類や部位が分かっていない。現在、私は小畑弘己氏を代表とする学術変革領域研究（A）『土器を掘る 22世紀型考古資料科学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究』の計画研究「土器製作技術と植物性混和材」で、繊維土器の解明を進めており、今後、ある程度の成果が報告できると考えている。

## 2) 馬高式における火焰型土器のデザイン性 (第2図)

縄文中期には、勝坂式や阿玉台式土器など地域性の強い独特の土器が各地で製作されるようになる。そのなかでも、馬高式土器は、越後地域の中期中葉～後葉にかけて製作された土器型式で、いわゆる「火焰型土器」や「王冠型土器」などで構成される。しかし、この時期は、東北系の大木8a式系土器が主体をなし、「五丁歩式」(長澤2018)とされる曲隆線文土器の系統も数割含まれ、火焰型・王冠型は1割程度かそれ以下の組成率である。火焰型土器は、その形状から非常に有名であるが、そのなかでも製作技術の優劣が認められる(第2図)。1は祖型的な火焰型土器(1段階)で、2は2段階の火焰型土器でやや胴部が太い。3と4は比較的標準的な火焰型土器で、5～7は比較的大形で、器形・文様など優れた施文手法であると評価できる。

しかし、火焰型土器の場合は、ある程度の技術を要すると推測されるので、高い製作技術のなかでの優劣であると考えられる。このようなレベルでの優劣は、個人的な土器製作の経験値や手先の器用さなどに由来するのかもしれない。

## 3) 中期土器のレベルの低い土器 (第3図)

一方、縄文土器のなかには、いわゆる“下手な土器”がある。これらは、極端に成形や整形、文様施文が粗雑なもので、これまで、「下手な縄文土器」(守矢2012)や「規範を逸脱した土器」(山本2007)、「模倣土器」などと呼ばれてきた。しかし、これらは本格的に研究されることはほとんどなく、縄文土器研究のなかに埋没していると言ってよい。例えば、第3図1～5がその典型例である。これらは、通常の大木式土器や連弧文土器の文様を描いているものの、極端に線が蛇行したり、つながる部分が交差していたり、曲線や直線になっていない。さらには、成形段階で、粘土帯が厚く、成形から整形も上手くできずに、器壁厚がまちまちで、歪みが見られる。このような資料をどのように評価するのが重要であると考えられる。現状で、子どもが土器製作者の周辺で遊びの一環として真似て製作したものである可能性を想定している。

## 4) 沖ノ原式土器と加曾利E式土器 (第4図)

縄文中期において、1遺跡や1地域において、同時期に複数系統の土器が存在する場合がある。特に、型式圏や様式圏が重なり合う地域ではよく見られる現象で、新潟県魚沼地域では中期を通して認められる。この複数系統の共存が顕著なのが馬高式期であるが、中期末葉～後期初頭の沖ノ原式期も2系統以上から構成される(阿部2008a)。

沖ノ原I式期古段階は、在地の沖ノ原I式土器に加えて、大木9式系土器が1割ほど並存する(第4図6・7)。さらには、沖ノ原I式期新段階～沖ノ原II式期にかけては、在地系土器に加えて、加曾利EⅢ・IV式系土器が並存する(第4図8・9)。いずれの異系統土器も、磨消縄文手法が発達する段階で、無文部を平滑に研磨するのが特徴である。一方、在地の沖ノ原式土器は、胴部に無文部を残す充填手法をとるものの、無文部を平坦に整えたり、研磨したりしない手法を貫いている(第4図1～5)。さらには、胎土も砂粒を混和するというよりは砕いたような小礫を混和するのが特徴的で、文様も異系統土器に比べて、非常に独自性を示す。



これらの異なる系統が併存する背景は何なのか。単純な見方として、「ある系統」と「製作した集団」が同じ可能性である。一方で、一個人や一集団が複数系統の土器を作り分けることができる可能性である。これらは明らかになっていないが、中期末葉の土器の胎土分析からは、異系統の土器の多くは、在地と同じ粘土で作られていることが報告されている（三浦・建石・二宮 2013）。この点も、これからの縄文土器研究で解決していく必要があるだろう。

### 5) 大木 10 式土器における特殊な深鉢（第5図）

東北南部から中部に広がる中期末葉～後期初頭の土器型式である、大木 10 式土器は、キャリパー形も僅かに見られるが、胴部が膨らみ口頸部がやや外反して極端には括れない器形である。古段階は、縄文帯によるアルファベット文が主であり、文様構成は口縁部から胴部にかけて1段のものと、2段に分かれるものがある（第5図1・2）。

一方、我々が「深鉢」のカテゴリーで捉えている土器のなかに、特殊な器形の土器が存在している。典型例が、岩手県山田町石峠Ⅱ遺跡（北村・佐藤ほか 2020）から出土していることから、仮に「石峠タイプ」と呼称する。このタイプの土器は、胴部が膨らみ、頸部が括れて、本資料の場合は頸部に文様帯が存在する（第5図3・4）。口頸部が極端に外反して内湾する器形であり、口頸部は、注口付浅鉢にも似ている。大きな波状口縁になるのも特徴であり、赤彩されるものも存在する。文様は、特に突起状になる双頭渦巻文が特徴で、多用される。これらは、特殊な土器で、深鉢形ではあるが、通常のものとは別の特殊な土器であると考えられる。類例は、それほど多くないが、福島県中通り・浜通りから岩手県南部まで広がっており、注目すべき資料である。

### 6) 堀之内2式土器の変化（第6図）

後期になると、やや土器自体の器壁が薄くなり、焼きが良くなる傾向があるが、特に堀之内2式期には、薄い器壁に黒色研磨された土器が見られるようになる（第6図1～4）。深鉢だけでなく、浅鉢や注口土器、土偶にも同様な手法が用いられる（第6図5～7）。これらの土器製作技術の変化は、何を意味しているのか。これまでの見解では、黒色研磨の手法は、「燻べによる炭素吸着処理」（秋田 2008）によって生み出されると指摘されている。この手法は、次の加曾利B式や、それ以降の土器型式、晩期大洞式土器へと継続する。また薄手の器壁は、どのような製作技法によるものか明確ではないが、一般的にケズリやカキトリによるという見方が主流である（秋田 2008）。

## 3. 遺構研究における構築技術

### 1) 竪穴住居の製作技術（第7図・第8図）

次に、縄文時代の竪穴住居研究では、技術的な議論はほとんど行われていない。それは、上屋構造や内部構造が消えてなくなってしまうため、構築技術や住居構造としての発展というものを認識しづらいからである。とは言え、竪穴住居の構造や建築技術がどのように変化したのかを明らかにすることが今後の課題である。岩手県一戸町御所野遺跡において、土葺屋根の可能性が指摘され（浅川・高田・西山 1998a・b）、その後も土葺屋根の可能性が主張されているものの（阿部 2002・

2008b、斎藤 2006 など) 関東・中部地方では検討が進んでいない。少なくとも縄文時代の竪穴住居が、草葺屋根なのか、土葺屋根なのかを明確にしていく必要があるだろう(第7図)。

一方、石で構築されたものは、腐食せずに残るため議論しやすい。縄文中期には屋内炉が発達するが、特に「複式炉」は、縄文時代でも最大規模を有する屋内炉で、形状も独特である(第8図)。複式炉の構築技術は、それほど解明が進んでいないが、調査事例から、炉の掘方を掘削して、炉体土器を埋設、平坦な石などを敷いていき、その隙間に土を詰めたりすると考えられる。たぶん石組部の底面から石を配して、徐々に壁面から床面に近い部分に石を配置していくのではないかと考える。福島県や山形県の複式炉は非常にきれいな形をしているが(第8図1・2)、魚沼地域の複式炉は他地域のものと組み方が大きく異なり、偏平礫を立て並べて配置する間に小礫や半割礫を充填する「小礫充填手法」をとる(第8図3)。この手法は、祖形的なものから最盛期の複式炉まで使われる手法であり、地域的伝統とみられる。

## 2) 大規模構築物の構築技術

これまで環状列石の研究をしてきたこともあり(阿部 1998・2000・2008b・2011・2018・2019・2021)、最後に環状列石の構築技術についてみていきたい。

環状列石の研究では、1990年代後半に新たな発掘調査事例から、大規模な土地造成の存在が指摘されてきている(遠藤 1997、小林 1997、など)。この時期の土地造成は、石器(打製石斧など)や木製品を使用していると推測され、テミのような土を運ぶ有機質の容器も存在した可能性が想定される。これらは大規模ではあるものの、それ以前にも竪穴住居を構築してきた技術があるので、環状列石の土地造成はそれほど驚くべきことではないと考えられる。特に縄文早期末～前期にかけて東北地方では長軸長 20 m～30 mほどの大形長方形建物跡も構築されており、土木工事の技術や労働力という点ではそれ以前から存在していた技術であると考えられる。しかし、斜面などを造成して、そこに平坦地を構築することに意義があり、なぜその場所を選んだのかが重要であろう。

次に、環状列石構築で、注目されるのが、膨大な量の川原石を運んで構築している事例である。この顕著な例は、鹿角市大湯環状列石や北秋田市伊勢堂岱遺跡、青森市小牧野遺跡である。これらの遺跡では、30 kgや40 kgのものが通常であるが、場合によっては100 kgを越えるような大形礫も存在する。私が調査に関わった道尻手遺跡では、600 kgを超える大形礫が使用されていた。これらを、いつ、何人くらいで、どれほどの期間を費やして、どのように運んだのかは未だ解明されていない。小牧野遺跡では、本遺跡がある台地直下の川原から運ばれたもので、急斜面ではなく、迂回して緩やかな斜面を登った可能性が指摘されている(児玉 2006)。大湯環状列石では、構成礫の大部分が遺跡から数 km離れた大湯川から運ばれたものとされている(藤本 2015)。これまでの研究によると、(1) 残雪期にソリで運んだという説、(2) 通常のとりにコロや背負子のようなもので運んだという説がある。いずれも、立証は難しいが、実験や民族・民俗例、歴史史料から推測するしかないのが現状である。



## 4. 縄文時代の技術

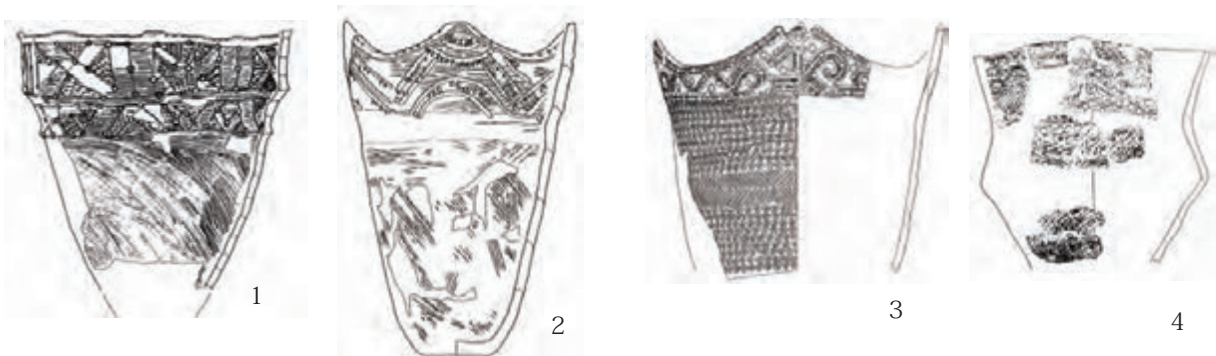
縄文時代の「技術」について、幾つかの視点でみてきた。一万年以上の長い時間のなかで色々な変化が認められるが、全てが列島内で生み出されたのだろうか。なかには、大陸から入ってきた技術もあるかもしれないが、現状では大陸からの影響は明確ではない。一方で、土器や土偶などの人工物には、製作技術の優劣が認められるのは事実であり、そのなかには、子どもが土器製作の技術を習得する過程で生み出されたような土器も存在している。これまであまり注目されてこなかったような要素を含めて、縄文時代の技術やその実態を解明していくことが課題である。

### <引用参考文献>

- 秋田かな子 2008 「加曽利B式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 浅川滋男・高田和徳・西山和宏 1998a 「縄文時代の土葺屋根住居の復元（一）」『月刊文化財』417
- 浅川滋男・高田和徳・西山和宏 1998b 「縄文時代の土葺屋根住居の復元（二）」『月刊文化財』418
- 阿部昭典 2002 「土葺屋根の竪穴住居と居住形態－東北日本の火災住居跡からのアプローチ－」『新潟考古』第13号
- 阿部昭典 2008a 「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 阿部昭典 2008b 『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
- 阿部昭典 2013 「土偶の美－その形と心」『別冊太陽 縄文の力』平凡社
- 阿部昭典 2015 『縄文の儀器と世界観』知泉書館
- 阿部昭典・國木田大・吉田邦夫 2016 「縄文時代における注口付浅鉢の成立過程と煮沸具化の意義」『考古学研究』第63巻第3号
- 阿部昭典 2021 「環状列石の出現に関する研究（3）」『縄文時代』第32号
- 遠藤正夫 1997 「小牧野遺跡環状列石に見る構築理念」『日本考古学協会 1997 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- 北村忠昭・佐藤剛ほか 2020 『石峠Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 児玉大成 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅹ』青森市教育委員会
- 小林 克 1997 「伊勢堂岱遺跡について」『日本考古学協会 1997 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- 斎藤義弘 2006 『日本の遺跡 17 宮畑遺跡 南東北の縄文大集落』同成社
- 長澤展生 2018 「火焰型・王冠型土器出現前夜の様相－五丁歩式土器の試み－」『津南シンポジウムXIV 馬高式土器の成立・展開・終焉－予稿集－』津南町教育委員会
- フランツ・ボアズ著（1927）、大村敬一訳 2011 『プリミティブアート（Primitive Art）』言叢社
- 三浦麻衣子・建石徹・二宮修治 2013 「縄文時代後期初頭等の黒曜石製石器産地分析と土器胎土分析」『津南シンポジウムⅧ予稿集 三十稲場式土器文化の世界－4・3ka イベントに関する考古学現象②－』津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会

### <図の出典>

※発掘調査報告書から引用しているが、紙幅の都合により報告書は省略したい。



1:飛ノ台 (船橋市)、2:芦ヶ崎西平 (津南町)、3:二ツ木向台 (松戸市)、4:八栄北 (船橋市)

第1図 早期後葉～前期中葉の繊維土器



1・4・7:道尻手 (津南町)、2・5:笹山 (十日町市)、  
3:原・居平 (魚沼市)、6:堂平 (津南町)

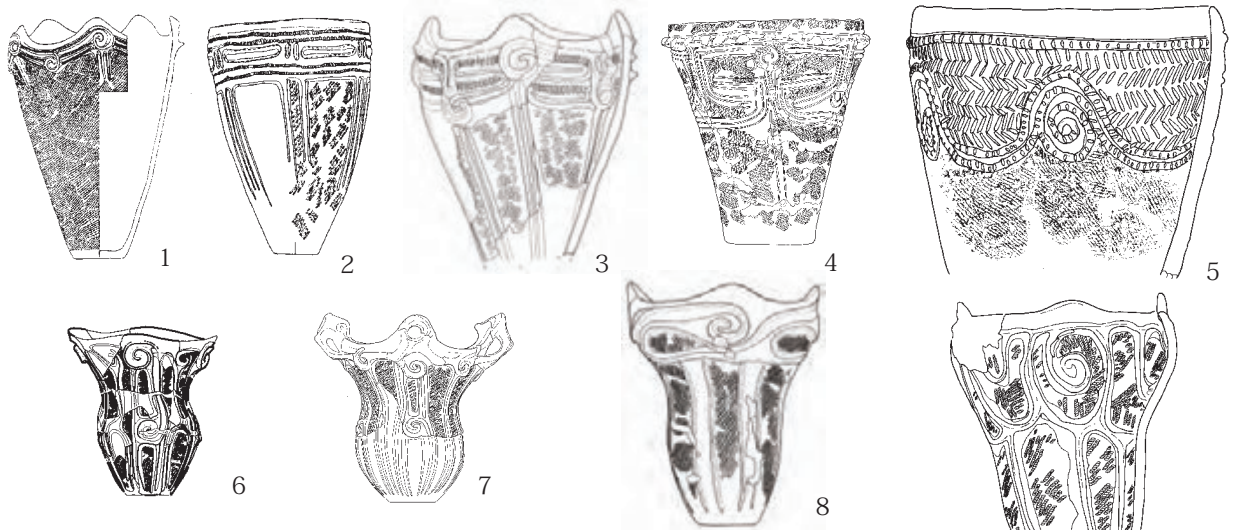
第2図 火焰型土器のいろいろ (S=1/10)



1:道尻手 (津南町)、2:野首 (十日町市)、3:春木山 (村上市)、  
4:大熊仲町 (横浜市)、5:川尻中村 (相模原市)

第3図 縄文中期の技術レベルの低い土器例





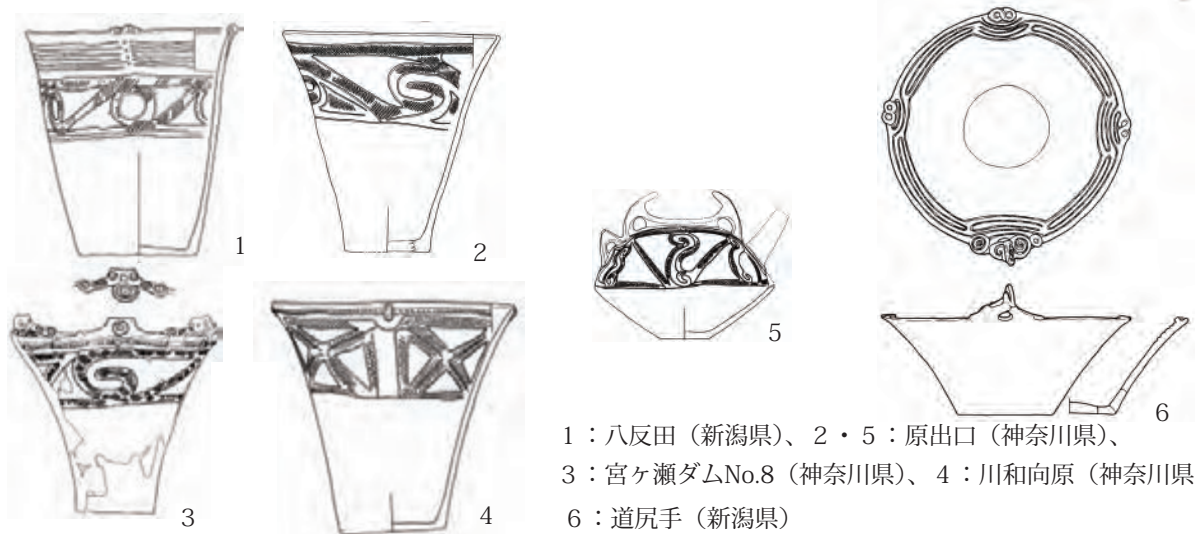
1・7：沖ノ原（津南町）、2・3・4・8：堂平（津南町）、5：道尻手（津南町）、6：布場上原（魚沼市）、9：笹山（十日町市）

第4図 越後地域の縄文中期沖ノ原式・大木9式・加曾利EIII・IV式土器（S=1/8）



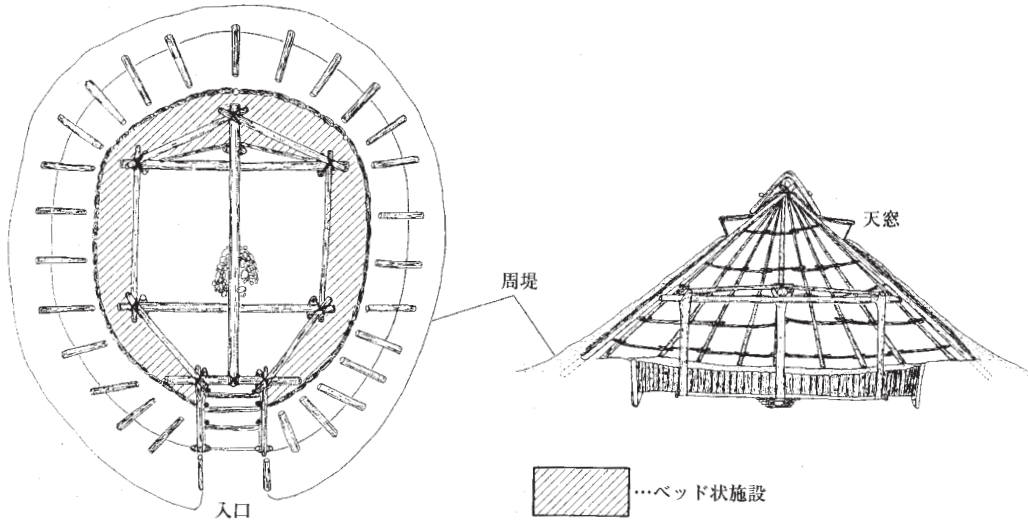
1：越田和（福島県三春町）、2：咲田（福島県郡山市）、3：石峠II（岩手県山田町）、4：弓手原A（福島県福島市）

第5図 「石峠タイプ」の土器例（S=1/8）

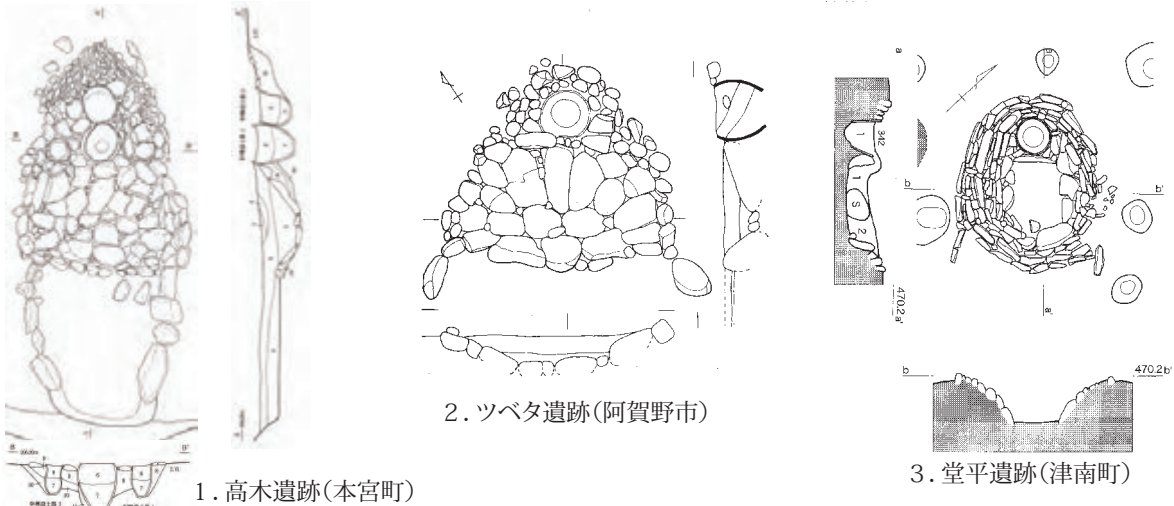


1：八反田（新潟県）、2・5：原出口（神奈川県）、3：宮ヶ瀬ダムNo.8（神奈川県）、4：川和向原（神奈川県）、6：道尻手（新潟県）

第6図 縄文後期・堀之内2式土器の変化



第7図 堂平遺跡の火災住居跡をもとにした復元図

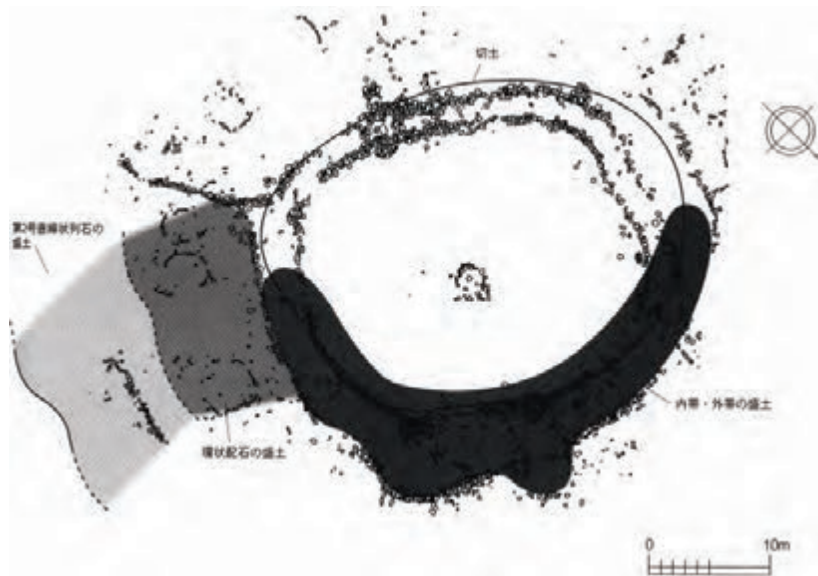


1. 高木遺跡(本宮町)

2. ツベタ遺跡(阿賀野市)

3. 堂平遺跡(津南町)

第8図 複式炉の構築法の地域性：東北南部と魚沼地域



第9図 小牧野遺跡の環状列石の土地造成 (児玉2006)

## はにわの造形と技術

## —人物埴輪を中心に—

大正大学文学部 教授 塚田 良道

## 1 埴輪の歴史

埴輪は、粘土で様々な形を作り、焼成して、古墳に並べた墳丘装飾。弥生後期に吉備（岡山県）で成立した特殊器台をもとに大和（奈良県）で古墳時代前期に円筒と壺の埴輪が成立。鶏、家、蓋・盾・甲冑などの器財埴輪、さらに馬などの動物埴輪と人物埴輪が加わるが、前方後円墳の終焉で消滅。

## (1) 前期（3世紀後半～4世紀後半）

配置場所：墳頂部の方形区画

主な種類：前期前半 壺、円筒 例) 奈良県桜井市メスリ山古墳

前期後半 鶏、家 + 盾、蓋などの器財 例) 三重県上野市石山古墳

## (2) 前期末～中期中頃（4世紀末～5世紀中頃）

配置場所：造り出しと周濠

主な種類：家、導水施設、船 例) 兵庫県行者塚古墳、三重県松阪市宝塚1号墳

周濠に水鳥 例) 大阪府藤井寺市津堂城山古墳 … おもに近畿地方

## (3) 中期中頃～後期（5世紀中頃～6世紀末）

配置場所：中堤、造り出し 例) 大阪府堺市大山古墳、同高槻市今城塚古墳、

主な種類：馬（動物）、人物 例) さきたま稲荷山古墳、高崎市保渡田八幡塚古墳

… 関東地方で大流行（※人物埴輪出土遺跡の7割が関東）

## 【参考史料】

皇后日葉酢媛命、薨ず。葬に臨むに日有り。天皇、群卿に詔して曰わく、「死に従う道、前に不可ということを知れり。今このたびの葬にいかんせむ」とのたまう。ここに野見宿禰、進みて曰さく、「それ君王の陵墓に生きたる人を埋づみ立てるは良からず。豈に後葉に伝えることを得ん。願わくば今便事を議して奏さん」ともうす。則ち使者を遣して、出雲國の土部壹百人を喚し上げ、自ら土部等を領して、埴を取り以て人馬及び種種の物の形を造作す。… 仍ちこの土物を號して埴輪という。亦是立物と名づく。（『日本書紀』卷六 垂仁天皇32年秋7月）



## 2 埴輪作りの基本

埴輪の人馬の形像は、壺甕などの容器や、円筒の如き工芸品を作った土師部の工人が、葬祭の儀礼の変化と共に彫塑の方面にも進出した結果に過ぎないのでありますから、固より美術として其の造形に多大な期待をかけることは出来ないであります。

(濱田耕作『考古学研究』座右宝刊行会 1939)

- ① 粘土紐を円筒形に巻いて作る → 板切れで表面を撫でる 「ハケ目」  
…途中で乾かしながら、上に積んでいく。重いものは分割して作る。
- ② 野焼き → 4世紀末～5世紀初頭頃に窯焼きへ …須恵器の製作技術の導入  
例) 新池遺跡(大阪府高槻市上土室 = はむろ) …埴輪作りのムラ  
丘陵に埴輪窯と工房(建物と粘土貯蔵施設) 5世紀中頃～6世紀中頃に操業  
「摂津国三島郡埴廬」『日本書紀』欽明天皇23年条に記載あり

## 3 人物表現の方法

### (1) 省略

埴輪人形を近くからではなく、三間、五間、あるいはそれ以上に、時には二、三十間の距離を置いて、ながめてみる必要があるように思う。それによって埴輪人形の眼は実に異様な生気を現してくるのである。もしこの眼が写実的に形作られていたならば、少し遠のけばはっきりとは見えなくなるであろう。しかるにこの眼は、そういう形づけを受けず、そばで見れば粗雑に裏までくり抜いた空洞に過ぎないのであるが遠のけば遠のくほどその粗雑さが見えなくなり、魂の窓としての眼の働きが表面に出てくる。

(和辻哲郎「人物埴輪の眼」『和辻哲郎随筆集』岩波文庫 1995)

- ①削除：本来あるはずものを造形しない  
例) 二本の足を造形しない、衣服を表現しない、指先を表現しない、など
- ②変形：本来ある形を簡単な形、もしくは異なった形にする。  
例) 耳たぶを粘土紐による輪で表現、女性の乳房を小さな二つの粘土粒で表現、など

↓

古墳時代に実在した現実の人やモノをモデルとし、細部を省略して造形

## (2) 人物の作り分け 男女、全身半身、立坐、衣服、所作

- |                             |   |          |
|-----------------------------|---|----------|
| ① 坐像・・・・(高位の男女)             | } | 五形式の配置規則 |
| ② 女性立像・・・・(食膳奉仕の女性)         |   |          |
| ③ 男性全身立像・・・・(身分の高い男性と武人)    |   |          |
| ④ 片腕を掲げる男性半身立像と馬形埴輪・・・・(馬子) |   |          |
| ⑤ 盾を持つ男性・・・・(古墳を守る武人)       |   |          |

## 【参考史料】

ここに男大迹天皇、晏然自若として、胡床に踞坐す。陪臣を齊え列ねて既に帝の坐すが如し。

(『日本書紀』継体元年 <507> 正月条)

使者曰く、倭王は天を以て兄と為し、日を以て弟と為す。天未明の時、出でて政を聴くに、跣  
 踏して坐す。日出でて便ち理務をやむ。我弟に委ねん、と。(『隋書』卷 81 東夷伝倭国条)

## (3) 工人の判別

- ① さきたま稲荷山古墳の人物群像 (5世紀後半)
- 人物埴輪の作り方が四種類 ・ 製作技法 例) 顔面(あごや耳)の作り方  
 ・ 工具 例) 鼻の穴の刺突棒、板切れの木目の年輪  
 …… さきたまで最初の古墳を築造するにあたり系譜の異なる各地の埴輪工人を集めた
- ② 埼玉県鴻巣市で作った埴輪を、千葉県市原市の古墳に樹立  
 生出塚埴輪窯跡 山倉1号墳

## (4) 関東地方における作り方の変容

近畿地方 一貫して変わらず!

例) 女性埴輪: バチ形の鬘、袈裟状衣着用、両腕を前に器物所持、耳飾りなし  
 腕は中空

関東地方 最初は近畿地方を模倣するも、徐々に離れ、独自の造形へ変化

例) 女子埴輪: バチ形の鬘で耳環なし → 分銅形の鬘で耳環ありへ  
 両腕を前に器物所持 → 片腕で器物所持 → 無所作

☆6世紀前半と6世紀後半で大きく変化!

… 大形前方後円墳築造の激増と軌を一にした現象



図1 墳丘を囲む円筒埴輪列（保渡田八幡塚古墳）



図2 後円部の埋葬施設を囲む円筒埴輪の方形区画（メスリ山古墳）  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『巨大埴輪とイワレの王墓』2005

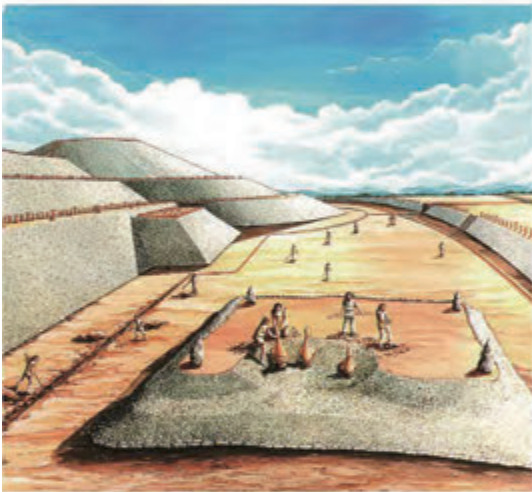


図4 周濠の島におかれた水鳥埴輪（津堂城山古墳）  
藤井寺市教育委員会『後の五王（讃、珍、濟、興、武）の時代』1995



図3 埋葬施設を囲む器財埴輪の方形区画（石山古墳）  
京都大学総合博物館展示



図5 中堤に配列された人物・動物埴輪群像（今城塚古墳）

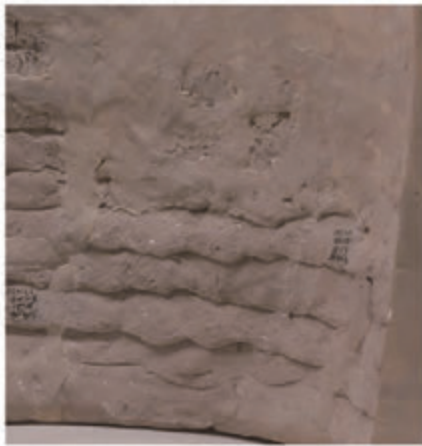
右：家形埴輪、男性坐像、女性立像  
左：動物埴輪、男性立像（その奥に右の写真が映く）



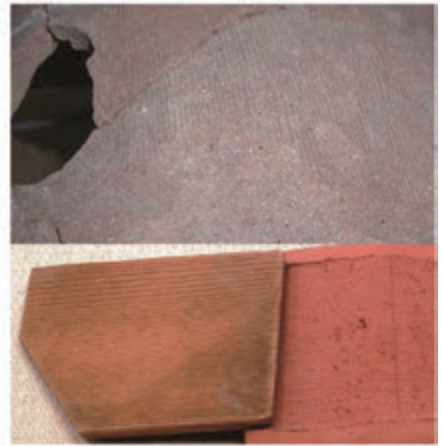
図6 埴輪の作り方の原則



円筒埴輪



粘土紐の積み上げ状態 (内面)  
「ハニワの作り方」今城塚古代歴史館 2022 展示



ハケ目 (外面) と工具 (板切れ)  
※下の写真は左に同じ



人物埴輪の外表面と内面  
さきたま稲荷山古墳出土



中空の腕



馬の頭も円筒形



三つに分割して製作したパーツを  
組み合わせた家形埴輪  
今城塚古墳

分割

分割



黒斑・・・野焼き  
「ハニワの作り方」  
今城塚古代歴史館 2022 展示



図7 新池遺跡 大阪府高槻市（上に埴輪製作工房・斜面に埴輪窯）



図8 新池18号埴輪墓 6世紀前半 長さ約8m  
埴輪を焼いた地層が左半分に埋積

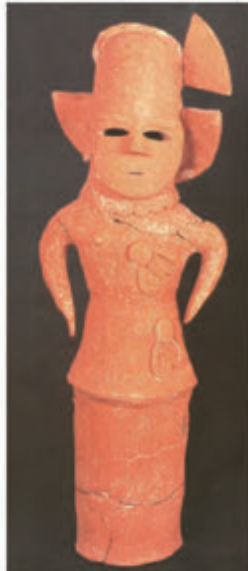


図9 人物の表現方法  
・・・省略

- ①削除
- ・眼の黒眼と白眼
  - ・衣服
  - ・指
  - ・脚
- ②変形
- ・髪型
  - ・頭部の比率
  - ・腕の長さ



行田市酒巻14号墳

行田市酒巻14号墳

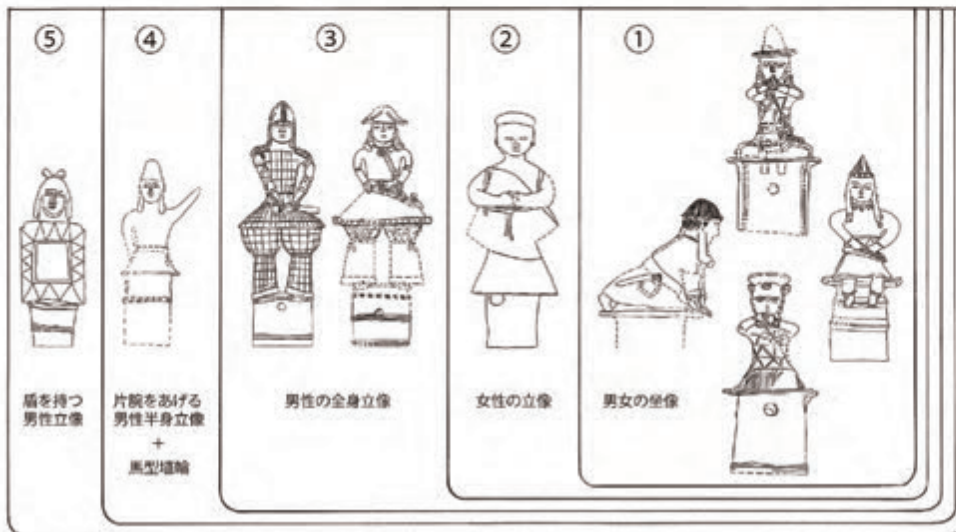


図10 人物埴輪の配置規則  
（塚田「人物埴輪の文化史的探究」二〇〇七を一部改変）



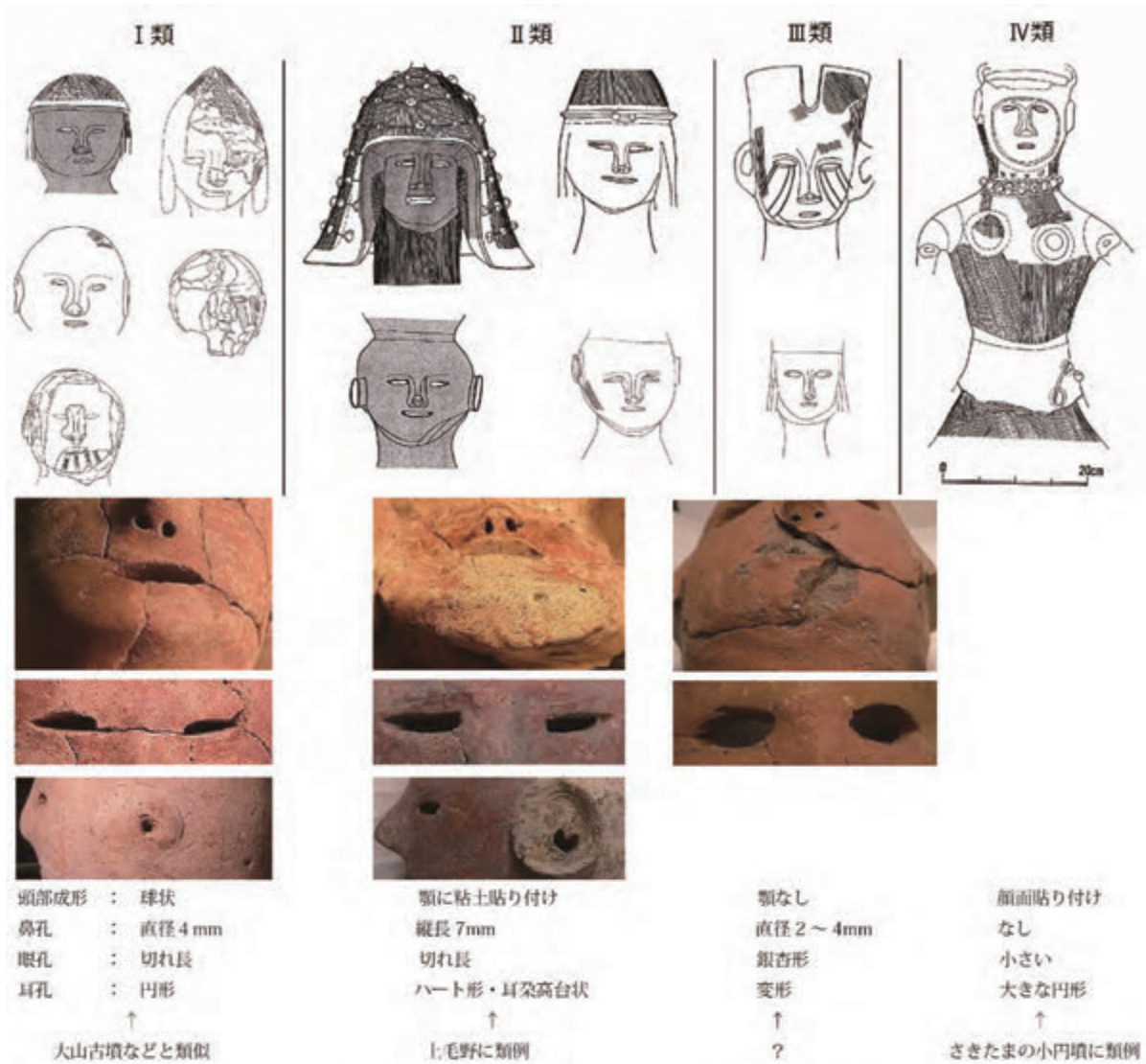


図11 さきたま稲荷山古墳における四種類の人物埴輪の作り方とその類例  
埼玉県教育委員会編『史跡埼玉古墳群総括報告書』2018、ほか

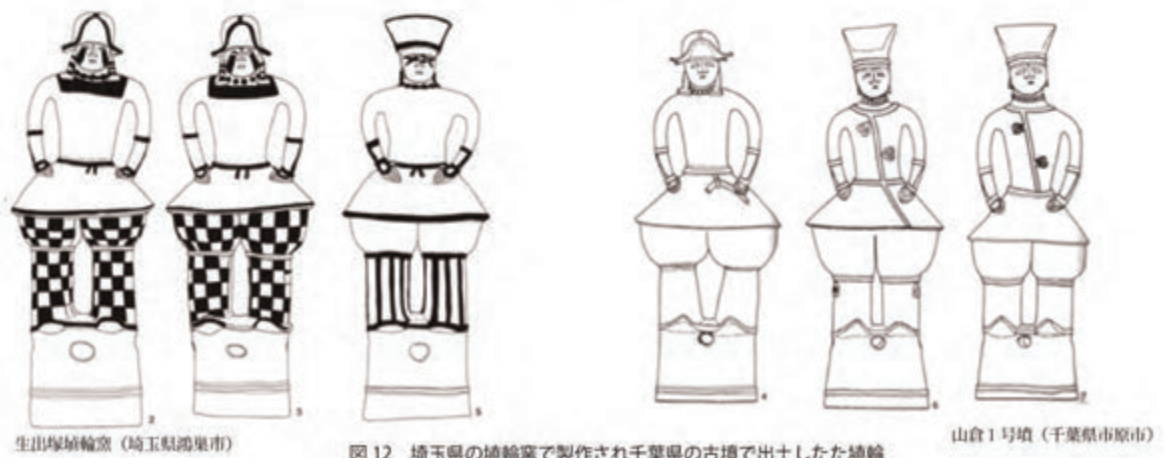


図12 埼玉県の埴輪窯で製作され千葉県で出土した埴輪  
小嶋健司ほか『市原市山倉1号墳』市原市文化財センター 2009

東北	岩手	1	中部	福井	1	四国	広島	6
	宮城	2		静岡	13		山口	1
	山形	1		愛知	15		徳島	2
関東	福島	11	近畿	三重	49	九州	香川	3
	茨城	189		滋賀	6		愛媛	6
	栃木	55		京都	23		福岡	39
	群馬	332		大阪	57		佐賀	7
	埼玉	239		兵庫	3		熊本	10
東	千葉	113	中・西	奈良	34	宮崎	3	
	東京	9		和歌山	15	大分	3	
	神奈川	22		鳥取	18	鹿児島	1	
	長野	11		島根	7	合計	1336	
中	石川	3		岡山	26			

図13 人物埴輪の県別出土数 (坂田 2007 をもとに作成)



図14 冠衣と袴かけの女性埴輪の分布 (坂田 2007 をもとに作成)

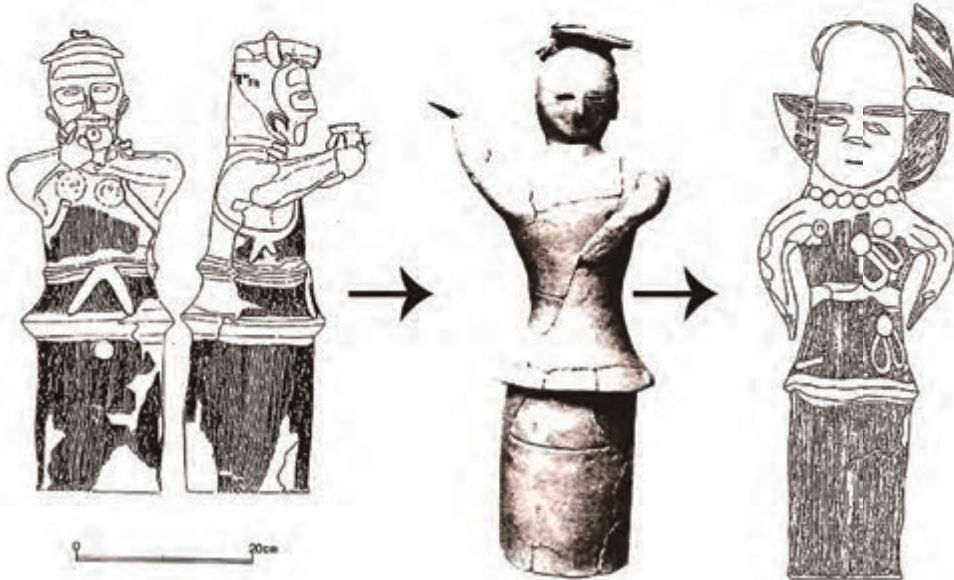


図15 関東地方における女性埴輪の所作の要容 (坂田 2007 をもとに作成)



## 洞穴遺跡が明らかにする旧石器時代の狩猟技術

慶應義塾大学文学部 教授 渡辺丈彦

### 1. 旧石器研究か旧石器文化研究か？

縄文時代以前の日本列島に人類が存在したかという問題は、明治期以降に急速に発展した日本考古学において常に大きな研究テーマの一つであった。それを解明するため、様々な取り組みが断続的に行われたものの、それが最終的に解決するのは、群馬県笠懸村（現みどり市笠懸町）岩宿遺跡において相沢忠洋が、関東ローム層から旧石器を発見する1949年（昭和24年）のことである。それ以降、日本列島の各地から旧石器時代の遺跡の発見が相次ぎ、現在までにその数は1万か所を超え、世界的に有数の分布密度を誇る。しかしながらそこから出土する膨大な考古資料から復元される日本の旧石器文化には大きな偏りがあることが常々指摘されている。その最大の理由は、日本列島を覆う表層土壌の多くが酸性の火山灰土であり、本来存在していた骨や木などの有機質遺物が失われ、概ね石を材料とした石器のみが遺存するという事情にある。世界的には、条件がある程度整えば、石以外の素材の各種道具（木器・骨角器）、旧石器時代人が入手した食料資源（動物・植物）、旧石器時代人そのもの（人骨）などが一つの遺跡から見つかることが多くある。そしてそれらを通して総合的な視野に立った旧石器時代像（旧石器文化）が提示されている。しかしながら日本では本来存在していた有機質遺物を欠いたまま、ほぼ「石器・石製品」の分析を通してのみ研究が進められてきた。その結果、日本の旧石器時代研究は、こと「旧石器」に限定すれば、その精緻さでは世界に冠たるレベルまで発達した。しかしながらそれはあくまで旧石器文化の一部、あくまで「旧石器研究」であり、総体としての「旧石器文化研究」そのものではない。

この問題を、本講座のテーマである「技術」の問題に引き付けて説明をしてみよう。前述の通り、日本列島の旧石器時代遺跡の在り方は特殊で、ある程度の水平的・垂直的範囲内にみつかる石器、炭化物粒、そして拳程度の大きさの礫がほぼすべての遺物である。このうち、炭化物粒のまともりは炉などの火を焚いた場所、礫のまともりは調理用の施設と考えられているもののその数は少なく、多くは石器の一定空間内でのまともりからなる。旧石器研究者はこの石器について、個別の形態分析あるいは石器同士の接合作業分析を通して、その製作技術の復元を行う。そして個々の石器に残された刃こぼれなどの分析、いわゆる「使用痕分析」を通して、石器の用いられ方を推定する。しかし、それらが如何に精緻に行われたとしても、最終的に、狩猟対象獣自体が遺跡から出土しない以上、その狩猟対象獣の具体的種類を特定し、その狩猟技術の具体を復元することは極めて困難である。一方、このような厳しい状況において、同一遺跡内から、旧石器と共に有機質遺物が出土し

た事例もわずかではあるが存在する。そこで本講座では、まず旧石器と共に有機質遺物が共に出土する可能性のある遺跡環境について概観することとする。次に狩猟対象獣の具体的種類の特定と、その狩猟技術の具体的復元を目指した稀有な研究事例を紹介したい。

## 2. 動物骨などの出土が有望視される遺跡環境とは

前述の通り、日本列島には旧石器時代の遺跡数は1万か所を超えるが、有機質遺物が確認される遺跡数は著しく少ない。第1図に国内の旧石器時代人骨出土遺跡と旧石器時代人が何らかの形で介在したと考えられる動物骨が出土した遺跡を示す。まず後者からみてみると北海道江別市柏台I遺跡、岩手県一関市花泉遺跡、神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群、長野県野尻湖立ヶ鼻遺跡がある。開地遺跡の柏台I遺跡・吉岡遺跡群は動物骨の出土数は少ないものの、比較的出土数の多い花泉遺跡は泥炭層遺跡、野尻湖立ヶ鼻遺跡は湖底遺跡であり、水分などによって外気から遮断されるという堆積環境が有機質遺物の保存に大きな影響を与えることがわかる。

次に、旧石器時代人骨が出土した遺跡をみると、その地理的分布に大きな偏りがあることがわかる。現在日本で確認されているのは、静岡県浜松市根堅遺跡、沖縄県那覇市山下洞穴、同八重瀬町湊川フィッシャー遺跡、同県久米島町下地原洞穴、同県宮古島市ピンザアブ洞穴、同県石垣市白保竿根田原洞窟など10か所が知られるが、根堅遺跡出土の浜北人骨以外はすべて西南諸島からのものであり、いずれもが琉球石灰岩に形成された洞窟あるいはフィッシャーからの出土である。また本州島唯一の出土事例である浜北人骨も石灰岩フィッシャーからの出土であることも合わせると、アルカリ質の強い石灰岩が人骨の遺存に大きな影響を与えたことがわかる。

この様に考えると、日本の国土の大半は火灰土に覆われ、骨などの有機質が遺存しにくい環境にあるが、特殊な環境下の遺跡、例えば泥炭層遺跡・湖底遺跡・石灰岩洞穴では、石器などと共伴した形で出土する可能性は十分ある。次にそのような環境下の遺跡において、20年間にわたり狩猟対象獣の具体的特定と、その狩猟技術の復元を目指した稀有な研究事例を紹介したい。

## 3. 青森県尻労安部洞窟の発掘調査

**遺跡の概況(第2・3図)** 尻労安部洞窟は、青森県下北半島東北端、桑畑山東南麓標高33mの位置にある石灰岩洞窟である。洞窟前面に広がる河岸段丘は、下北丘陵の縁辺部に広く分布する約12万年前下末吉海進期の海成段丘に対比する。洞穴の開口する崖は最終間氷期の高海面期における海食崖であり、洞窟は海食洞と考えられている。現在の洞窟は、石灰岩採掘の影響などにより間口3.3m、奥行き2.5m、岩庇高2.0mの岩陰状の形状をなし、南南西に開口している。この洞窟の最大の特徴は、日本最大級の石灰岩地帯に立地する点であり、遺跡至近の石灰岩坑道からのオオツノジカ化石(写真1)の出土が知られるなど、本格的調査開始前から有機質遺物の良好な遺存が期待されていた(奈良他編2015)。

**遺跡の層序(第4図)** 本格的発掘調査は、慶應義塾大学、新潟医療福祉大学、東北大学などからなる尻労安部洞窟発掘調査団により 2002 年から始められ、現在も継続中である。これまでの調査により、合計約 70 m<sup>2</sup>を発掘し、地表下約 4.5m の基底部岩盤に至る 18 層を確認した。そのうち文化層はⅡ層(縄文時代中期末～後期)、Ⅳ・Ⅵ(縄文時代早期)、ⅩⅢ～ⅩⅤ層(旧石器時代)である。当初、ⅩⅤ層から基底部岩盤に至る堆積層には、洞穴形成直後の段丘礫層や約 11.5 万年前の洞爺テフラの存在が想定されたが、調査区内では確認できず、何らかの自然的要因により流失したと考えられる。

**縄文時代の遺物** 当該期の遺物としては、縄文土器、石器、骨角器、人骨、動物遺体が出土した。縄文土器には早期、中期、中期末～後期初頭、後期のものがあり、中でも後期の深鉢形土器の占める割合が高い。定形的石器としては、石鏃、縦型石匙、石錐、彫刻刀様石器、スクレイパーが出土している。各器種の出土層位と形態的な諸特徴を総合的に判断すれば、狩猟具としての石鏃は後期の、加工具としての縦型石匙、石錐、彫刻刀様石器などは早期の所産と考えられる。

人骨は成人女性 1 個体、性別不明の乳児 1 個体が散乱した状態で出土した。成人女性人骨の放射性炭素年代測定結果は 4286-4080calBP であり、縄文時代中期末～後期初頭に位置付けられる。また DNA 分析結果からは本人骨がアムール川下流域の先住民・ウリチや北海道縄文時代人以外に例のない稀な遺伝子型をもつこと、そして酸素・窒素安定同位体比の分析結果からは、海生魚類を中心とした海産資源と陸上の植物を組み合わせた生業を有していたことが示唆された。

動物遺体としては、海産貝類、海産魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土した。海産魚類・貝類が比較的多く出土したことは、出土人骨に対する酸素・窒素安定同位体比の分析結果とも調和的である。一方、特に興味深い資料として、洞窟最奥部の小規模貝層から出土した 2 個体のオオヤマネコ遺体がある(写真 2)。いずれも冬季または春季に死亡した 10 か月未満の個体であり、理化学的分析により大陸種との間で遺伝的分岐が進んでいること、主餌が草食獣であることがわかっている。最終氷期の列島に南下・到来したマンモス動物群の多くが完新世を待たずに絶滅する中で、オオヤマネコが縄文時代後期まで絶滅を免れていたことは、更新世から完新世に至る動物相の変化を語る上で貴重な知見といえる(奈良他編 2015、渡辺 2020 他)。

**旧石器時代の人工遺物(第5図)** その数は少ないが、6 点の旧石器が出土した。その内訳はナイフ形石器 2 点、台形石器 1 点、ナイフ形石器の一部と考えられる二次剥離剥片 2 点、剥片 1 点である。ナイフ形石器はいずれも珪質頁岩製の縦長剥片を素材とし、二側縁加工により一側縁に肩を作り出す(図 1-1、2)。同様な例は東北地方では、山形県新庄市上ミ野 A 遺跡、青森県八戸市田向冷水遺跡Ⅲにある。台形石器は、縦長剥片の基部および末端部を切断し、切断面に急斜度の剥離を加えることにより平面を台形に整えたものである(図 1-3)。遺跡周囲の地域で同様な形状・製作手順の台形石器の例は、津軽海峡を挟んだ北海道渡島半島南端に位置する湯の里 4 遺跡にある。ⅩⅢ～ⅩⅤ層の土壌全量に対して 2mm 目篩を用いて水洗選別を実施したが、微細剥片等は検出できなかったことから本洞窟では石器製作活動は行われなかったと推定される。石器の出土数が極めて少なく、定形石器の割合が極めて高いという器種組成上の特徴を合わせて考えると、本遺跡は短期間のキャンプ



サイトという性格が想定される（奈良他編 2015、渡辺 2018 他）。

**旧石器時代の自然遺物(写真3、第6図)** 動物遺体としてノウサギ、ムササビ、カモシカ、ヒグマ、ヘラジカなどが出土している。このうち特に多く出土したノウサギは、①通常、洞穴を生息場所としないこと、②その平面的・垂直的出土範囲が、ナイフ形石器2点などの出土位置に近接すること、③猛禽類などが吐出した餌残滓などの可能性も考えられるが、消化液により骨表面に生じる特徴的痕跡が認められないことから、狩猟活動の猟果として人為的に洞穴に持ち込まれた可能性が高いと考えている（澤浦 2015）。

#### 4. 尻労安部洞窟出土動物骨が旧石器時代研究にもたらしたもの

**旧石器時代日本列島の動物相** 旧石器時代の日本の動物相は、その後の地域絶滅によりその種類を減らしたものの、大きく分けて大陸からの二波の動物群流入によって形作られたと考えられた。その第一波は、寒冷化により東シナ海が陸化した中期更新世の65万年前・43万年前であり、その結果、中・大型陸棲ほ乳類に限れば、トウヨウゾウ・ナウマンゾウ・シナサイ・ヤベオオツノジカ・ニホンジカ・ニホンムカシジカ・オオカミ・クズウアナグマ・キツネ・タヌキ・ノウサギ・ニホンザルからなる動物相が本州島以南の地域に形成された。第二波は、12万年前前後のことであり、陸橋化した海峡を越え、シベリアからサハリン島を経由してマンモスゾウ・ヘラジカ・オーロックス・ステップバイソンなどが北海道に到来し、これは「マンモス動物群」と呼ばれている。この南北動物群は、本州以南と北海道の二つの地域にわかれて本来混ざることはない存在であった。この二つの地域を隔てる津軽海峡は、最浅部でも140mあり、最も寒冷化した時期でも陸化することはなかったからである。しかしながら、本州島最北端の尻労安部洞窟では「マンモス動物群」に属する小型動物はみつからないものの、ヘラジカや、現在は北海道にしか生息しないヒグマなどの中・大型動物は出土している。このことは、何らかの手段により北海道のマンモス動物群のうち、中・大型動物だけが津軽海峡を越えて本州島に到達したことを示している。古生物学者の河村善也によれば、津軽海峡は最終氷期最寒冷期の低海面期においてすら陸化することはなかったが、その幅を大きく狭小化、結氷、跳躍力の強い中・大型動物だけが海峡を越え本州島に流入したと考えている。この考えは、「津軽海峡氷橋」仮説とよばれ注目を集めているが、尻労安部洞窟の発掘調査成果がその大きな根拠となっている（河村・河村 2015）。

**旧石器時代人の狩猟技術** かつての日本の旧石器研究者は、遺跡からナイフ形石器や尖頭器など槍先と考えられる石器が出土すると、それをもってナウマンゾウやオオツノジカなどの大型獣を対象とした狩猟（「ビックゲーム・ハンティング」）を想起し、遺跡全体の主たる機能についてもそれを強調して語られてきた。それは狩猟対象の動物骨が出土しない以上当然のことであり、もし尻労安部洞窟から出土する遺物が前述の石器のみであったなら、講演者もおそらく同じことを考えたに違いない。遺跡からは、ナイフ形石器や台形石器など槍先に使われる石器も出土しているので、従前のイメージ通りに、洞窟を槍などにより大型動物の狩猟を行った短期間のキャンプサイトと結論付

けたはずである。しかし同洞窟から少量の中・大型動物（ヒグマ、ヘラジカ）に加えて、多量のノウサギが出土したことは、このイメージ形成が如何に脆弱で危険なものであるかを知らしめてくれた。確かに、「中・大型動物（ヒグマ、ヘラジカ）」と「ナイフ形石器と台形石器を用いた槍猟」をセットで語ることに問題はないが、出土動物骨の多くを占めるのはノウサギなどの小型動物なのだ。このノウサギの用途に関する議論は慎重に行うべきであるが、尻労安部洞窟の利用時期は、3万年前後の最終氷期最寒冷期であることが一つのヒントとなる。同洞窟発掘調査団はその寒冷な気候に着目して、ノウサギの狩猟目的の一つが毛皮利用にあったと考えており、実際同時期の大陸の遺跡ではそれを裏付ける考古学的証拠も見つかっている。そしてもし仮に毛皮入手を目的にノウサギ猟をしていたとするのなら、槍などを用いる狩猟方法は毛皮を大きく破損させるおそれがあり不適切である。そうしないための方法としては、主に威嚇猟（天敵の猛禽類の羽音に似せるように、木の棒切れや藁で編んだドーナツ状円板（ワラダ）を投げ飛ばし、ウサギの動きをとめて捕獲する）、括り罠猟、網猟、釣り天井式重し丸太を用いた罠猟など様々な「罠猟」が想定され、その具体的な民族誌的事例は、本州各地および沿海州の狩猟活動にみられる（天野 2000、佐藤 2000、澤浦前掲ほか）。

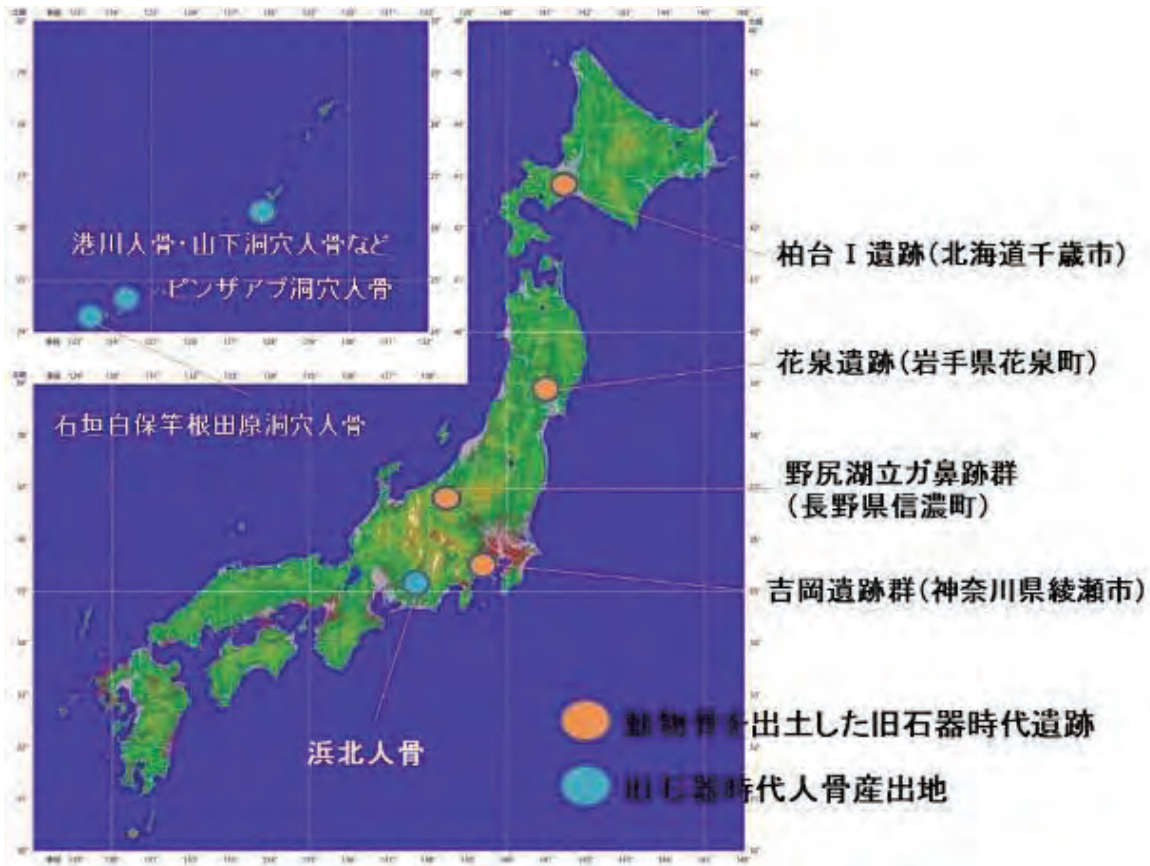
## 5. まとめ

一つの遺跡から、狩猟具としての石器と、その猟果としての動物骨が同時に出土した意義は大きい。尻労安部洞窟の発掘成果を例にとるなら、もし石器のみの出土であったなら、本来の遺跡の主要な機能「ノウサギの毛皮の入手」、そしてそのための狩猟方法「石器を用いない罠猟・威嚇猟」という結論には間違いなく至らなかったであろう。現実問題として、日本の多くの旧石器時代からは石器以外の遺物が出土せず、そこから少しでも多くの情報を引き出す努力を続けることは今後とも必要である。しかしその一方で、日本の「旧石器時代研究」を、「旧石器研究」から「旧石器文化研究」に深化させるため、自然遺物などの系統の違う遺物を入手する努力もまた求められる。

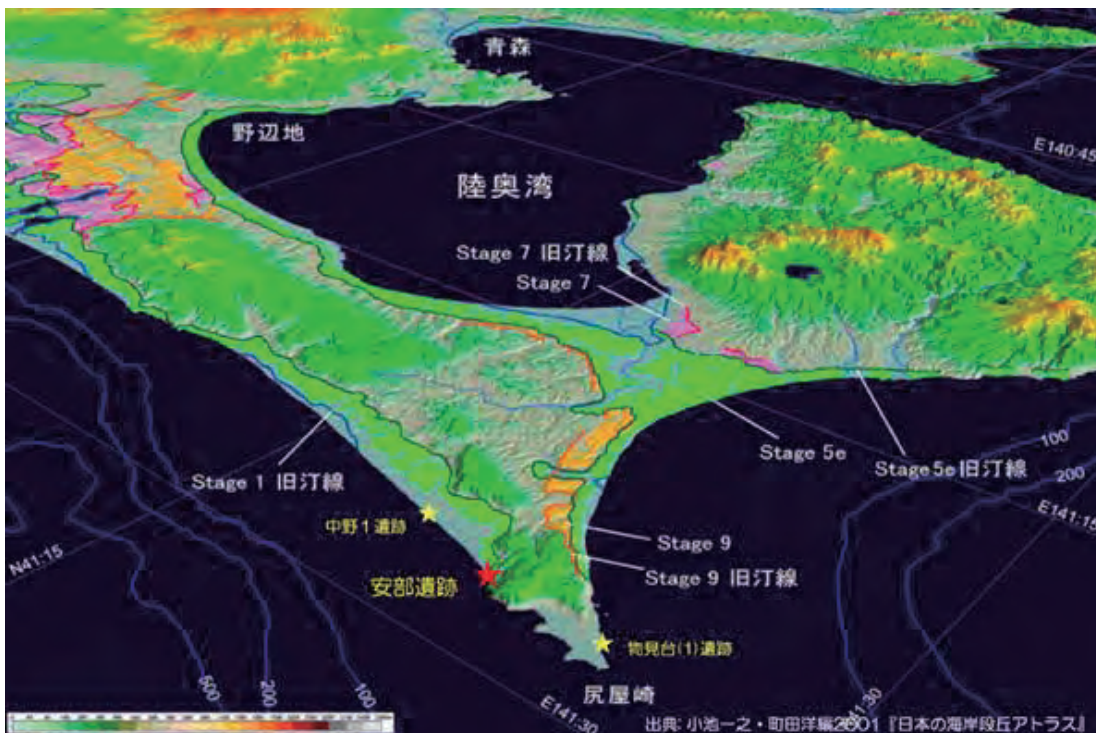
### 【主要参考文献】

- 河村善也・河村 愛 2015 「下北半島の遺跡のデータから見た本州北部の後期更新世哺乳動物相」  
『下北の石器時代－ 東通村尻労安部洞窟の調査成果』慶應義塾大学
- 澤浦亮平 2015 「旧石器時代の動物利用」  
『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟Ⅰ－ 2001～2012年度発掘調査報告書－』六一書房
- 佐藤宏之 2000 『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター
- 天野 武 2000 『野兎の民俗誌』岩田書院
- 奈良貴史他編 2015 『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟Ⅰ－ 2001～2012年度発掘調査報告書－』六一書房
- 渡辺丈彦 2018 「尻労安部洞窟出土台形石器の所属年代についての再検討」『東北日本の旧石器時代』  
東北日本の旧石器文化を語る会
- 渡辺丈彦 2020 「青森県東通村尻労安部洞窟」『季刊考古学』153号 雄山閣

◆第3講◆ 洞穴遺跡が明らかにする旧石器時代の狩猟技術



第1図 動物骨出土の旧石器時代遺跡と旧石器人骨産出地



第2図 下北半島の海岸段丘(出展:小池一之・町田洋編 2001『日本の海岸段丘アトラス』)



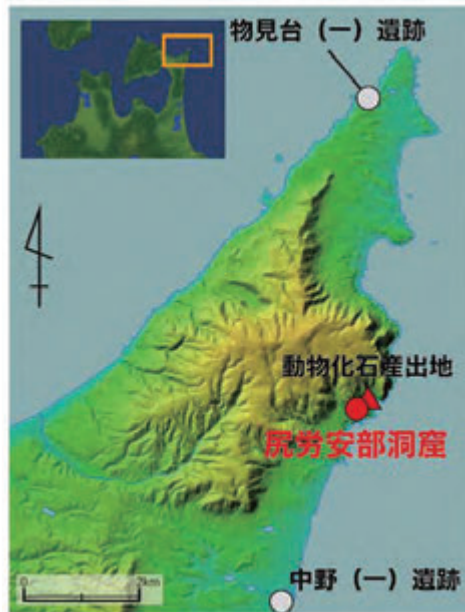
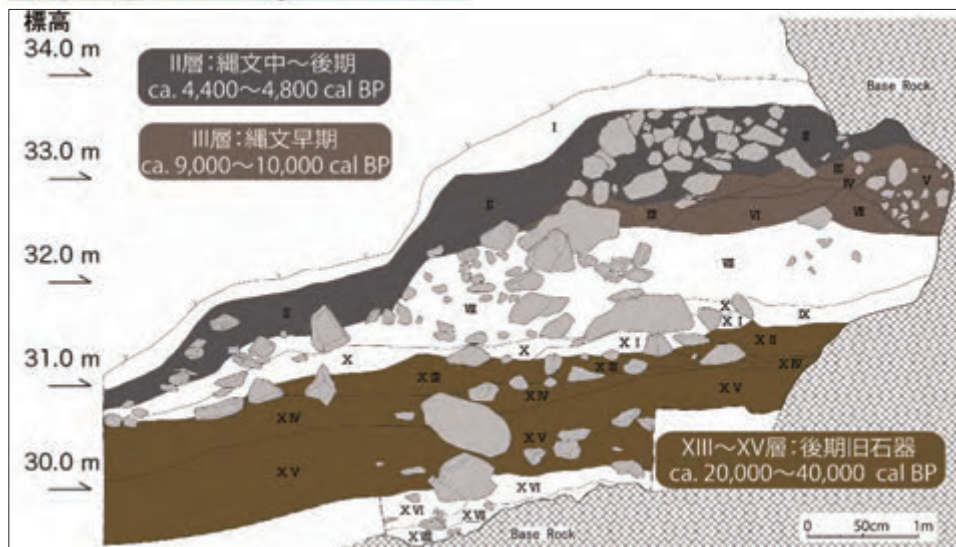


写真1 尻労安部洞窟周囲から出土した  
オオツノジカ下顎骨化石

第3図 尻労安部洞窟の位置

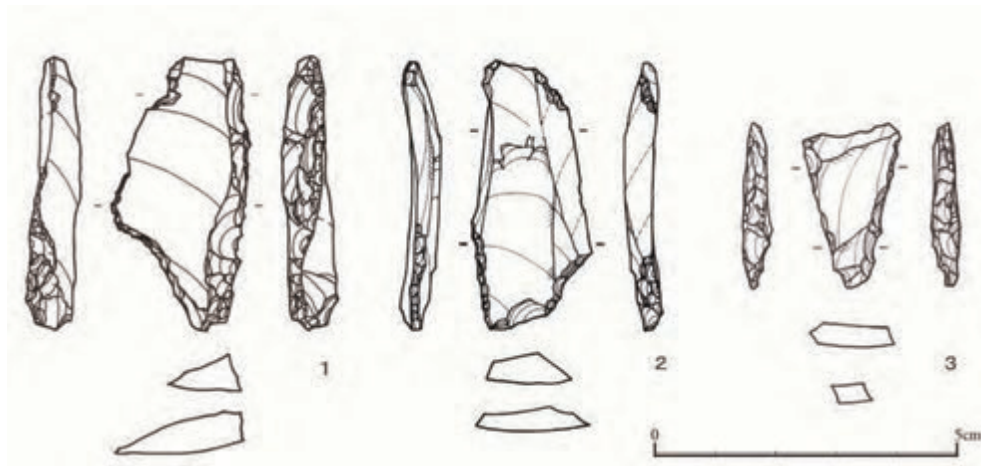


第4図 尻労安部洞窟の基本層序



写真2 尻労安部洞窟出土のオオヤマネコ化石(左)と現生ヨーロッパオオヤマネコ(右)

◆第3講◆ 洞穴遺跡が明らかにする旧石器時代の狩猟技術

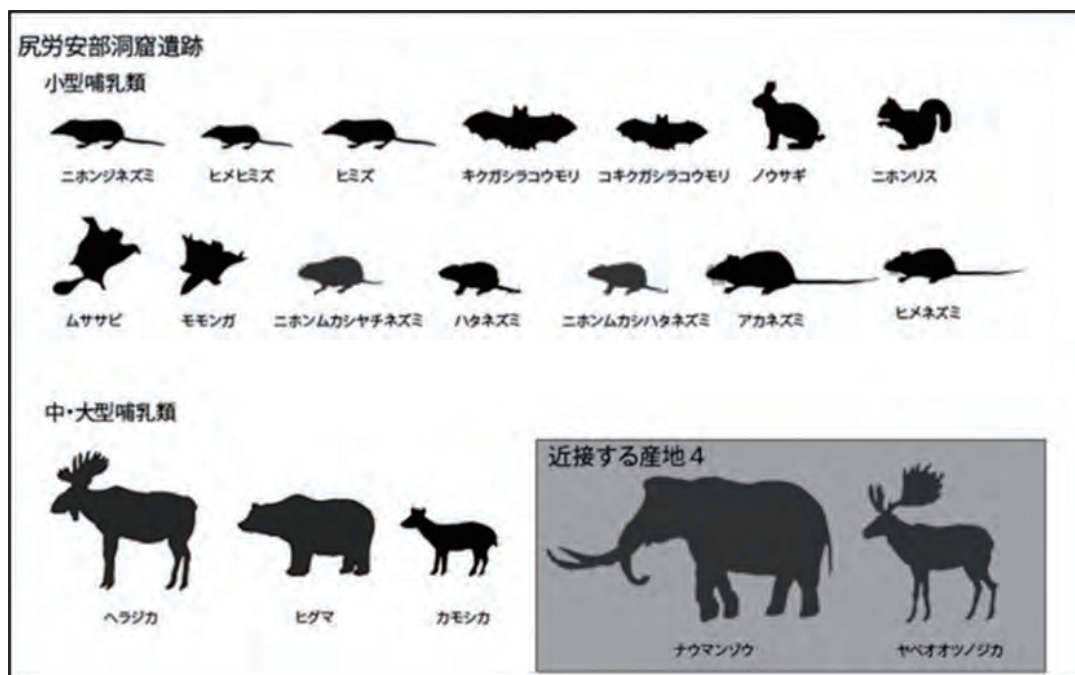


第5図 尻労安部洞窟出土旧石器(1・2:ナイフ形石器、3:台形石器)



写真3 尻労安部洞窟出土旧石器時代の動物化石

(左写真1:ヒグマ、2・3・8:ヘラジカ、4・5:ムササビ、右写真:ノウサギ)



第6図 尻労安部洞窟と近接産地の化石群集から復元した哺乳動物相 (出典:河村・河村 2015)



## 京式登り窯のフレキシビリティ

－近世・近現代京焼の多様性と職人の技術・生活－

早稲田大学人間科学学術院 准教授 余語 琢磨

はじめに

一般に「考古学」のイメージは、古い時期の遺跡を調査し、そこから掘り出された遺構や遺物について議論する、というものであろう。しかしながら、今回の「技術から過去を探る」講座では、2018年度から継続中の京式登り窯の調査、すなわち、新しい時期（近現代）の地上に残されている遺構（旧式の生産設備）を対象とした研究を紹介する。そこから、考古学の多彩な一面とともに、モノから「技術」や「過去」を探る際の面白さと難しさを、みなさんと一緒に考えてみたい。

### 1 民俗考古学と産業遺産

考古学で「技術」とそれに関連する「道具」や「遺構」を考える際、根本的な探究課題は、①どうやって作られたのか、②それらはどのように使用されたか、の2点であろう。この課題に対しては、考古学的な資料操作を重ねて推定する方法のほかに、対象物の自然科学的分析、文化人類学の調査成果である民族誌（民俗誌）の応用、実験考古学による技術復元など複数のアプローチがあり、併用することも少なくない。今回ご紹介する「民族（民俗）考古学」的方法は、物質文化と人間活動との関係を理解することをめざして、現代の民族文化や民俗技術を調査し、考古学の資料解釈に応用するもので、技術のみならず、社会的、経済的側面に関する情報を得る意味でも有益である。

一方、京都市内に散在する登り窯という、今ではほぼ使用されることのない窯業生産設備を対象とする点で、本研究は、いわゆる「産業考古学」的性格も帯びている。産業考古学は、20世紀以降の産業構造や技術の急激な革新により、近過去の技術体系や組織が失われていくことへの危機感から、当時の技術水準やそれを可能にした社会に関する研究と遺構保存の推進を目的とする。近年、産業遺産・近代化遺産などの名のもとに、その対象や意義づけは一層拡大し、ユネスコの世界遺産（文化区分）となるものも現れ、国際的な観光資源として注目を浴びるようになった。

民俗考古学と産業考古学は、相性がよい。なぜなら、比較的、近過去の技術であれば、存命の職人の経験談や、数世代を経て語り継がれてきた技術伝承のほか、現地に残された文献史料や写真資料が研究・展示に大いに活用できるからである。

### 2 「京焼」と関連産業集積地としての「五条坂」

「京焼」と総称される京都市周辺の陶磁器製造の起源は、安土桃山期の茶道具に遡る。その後、野々

村仁清<sup>にんせい</sup>、尾形乾山<sup>けんざん</sup>を代表とする数多くの名工が輩出し、19世紀には陶工が全国の陶業地に招聘され技術指導を行なった。栗田<sup>あわた</sup>・清水<sup>きよみず</sup>・五条坂を核とする京都産陶磁器は高級品の象徴となったが、明治維新による朝廷・公家や武家などの支持基盤の喪失は、京焼に大きな打撃を与えた。

生き残りをかけた明治期の京焼では、栗田口を中心に伝統的な上絵付の技術を活かした「京薩摩<sup>きょうさつま</sup>」など的高级輸出陶磁器や、清水・五条坂の伝統的染付磁器のほか、近代的窯業へ面目を一新した理化学陶磁<sup>がし</sup>・碍子<sup>がいし</sup>などが生産された。近代における大量生産の要請は、他の産地と同じように、徒弟的な工場の群立という生産形態から工場規模へ脱皮する業者を生み、小さな窯場はその下請けになる場合もあった。輸出用に大規模生産化した「栗田焼」は、欧米のジャポニズムの翳りにより明治期末から衰え始める一方、国内市場向けを中心とした「清水焼」の生産額は、明治中期に栗田口を凌駕していった。近世から小規模・零細業者が多いとされた清水・五条坂であるが、明治44年の『京都名所地誌』に「五条通……南北両側の人家はたいてい陶磁器の店にして清水焼の著名なものが多く」と描かれ、生産者のみならず問屋、小売店などの資本集積が進み、最も賑わう地区となった。

大正・昭和期に入ると、京焼の名声と技術に惹かれて全国から陶工が集まる一方で、瀬戸・美濃焼などに代表される機械化大量生産・コストダウンの成功への危機感が高まった。市街化して手狭になった五条坂から、南部の日吉<sup>じやがたに</sup>（蛇ヶ谷）・泉涌寺<sup>せんにゅうじ</sup>地区に生産地が拡大して中小規模ながら工場化が進む一方で、雇われ陶工らによる労働争議も起こった。この時期には、近代的な芸術意識にめざめた個人作家も誕生するようになり、河井寛次郎、石黒宗麿や河村兄弟らが、その代表である。

戦後の低迷から復興期に入った京焼は、登り窯の排煙をめぐる公害問題などを機に、郊外の山科に造成された清水焼団地や、唯一現役稼働する登り窯のある炭山<sup>すみやま</sup>（宇治）地区へと移転する業者も増えた。近代には20基前後あった五条坂の登り窯も、次々と閉窯し解体されていった。とはいえ、京都は、建造物や人的関係を根底から破壊する戦禍を免れ、職住一体の生計を営む住民が地域に居住し続けた数少ない都市であり、陶磁器業の発展と変容を追う民俗考古学調査に好適な地である。

### 3 いまに遺る京式登り窯（京窯<sup>きょうがま</sup>）と3次元測量

共同研究者木立らによる蓄積のうえに、2017年から新たに展開した民俗考古学調査では、五条坂を中心に市内にかろうじて残存している登り窯・工場の測量や、それらの所有者を含む京焼の生産・流通関係者、近隣住民への聞き取りを行っている。その目的は、ここ数年で操作性と記録性が飛躍的に高まった3次元測量技術を駆使して、あらためて関連設備の記録保存を図ること、加えて聞き取りの成果を活用した研究の精緻化にあった。また、その背景には、インバウンド急増による京都東山周辺の観光再開発により、京焼関連施設がさらに失われていくことへの懸念もあった。

「京窯」とは、主要な生産設備であった「本窯<sup>ほんがま</sup>（京都型の連房式登り窯）」をさし、ときに京都で造った陶器を総称することもある。京窯は、生産設備としての用を終えた後も、レンガ煙突に象徴されるその姿が産地（窯元）のシンボルであり続け、2017年の段階では、崩壊・半壊の窯も含めて五条坂に6基（市内各所に散在するものを加えるとさらに多い）が遺存していた。





本講義の後半では、石黒陶窯に遺された小型京窯の成立経緯とその技術的特徴について、3次元測量図、古写真・スケッチ、石黒自身や周囲の人々の書簡・日記などを駆使しながら、具体的に検証する。蛇ヶ谷の京窯における借り窯焼成といくつかの築窯の経験により形成された、石黒宗麿の創作活動や陶技から、技術／道具（京窯）／製品（作品）の関係が見えてくることを期待したい。

## おわりに…京窯（または京焼）のフレキシビリティ

石黒の仕事にみる多様性は京窯を使いこなした個人作家の技術の冴えであるが、京焼全体の生産と技術を理解するには、多くの関係者の仕事の細かい分化と相互関係性への視座が必要である。

京焼の生産工程は、成形・加飾⇒素焼⇒下絵付⇒施釉⇒本焼成⇒上絵付⇒焼付に大別されるが、そこには工房内または工房（職人）間の分業と協業が成立している。生産単位も（近代以降の工場に類するものを除いても）、名人気質の個人作家、家族経営的でありながら職人を雇用する窯元、下請け的に1点いくらの賃仕事を受ける独立職人まで漸移的な形態があり、固定的というより長期的な流動性もある。また、その意匠をはじめとする生産管理全体について、京焼を扱う産地問屋の力は20世紀後半まで支配的で、商業者が差配する西陣織に似た問屋制家内工業的な性格もあった。

京焼の「技術」を考える際、伝統的都市工芸がどのような需要層の要求に応じていたのか、その要望は誰を介してどのように生産者に伝わっていたのかを考慮しなければ、「多品種少量生産」という特徴を捉えることはできない。京焼にみる製品と生産技術の多様性は、まさに都市京都という消費地型の立地と、京窯のもつフレキシビリティの“賜物”なのである。

### 【主要な参考・引用文献】

- 一島政勝 2006「登り窯の歴史と現在」『京焼と登り窯—伝統を支えてきたもの』文部科学省 21世紀 COE (立命館大学) 近世京都手工業生産プロジェクト
- 射水市立新湊博物館 2000・2001『石黒宗麿書簡集』・『石黒宗麿書簡集』第2集
- 小野公久 2014『評伝 石黒宗麿 異端に徹す』淡交社
- 金子賢治 (監修) 2015『石黒宗麿のすべて』読売新聞社
- 木立雅朗 2015「元藤平陶芸登り窯について—遺構と記録」『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究報告書』
- 木立雅朗 2020「登り窯の終焉と記憶をめぐる文化資源—五条坂・道仙科学製陶所の民俗考古学」『令和元年度京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書 (洛東編)』京都府立京都学・歴史館
- 京都国立博物館 (編) 2006『京焼—みやこの意匠と技』京都国立博物館
- 藤岡幸二 1962・1972『京焼 百年の歩み』・『京焼 その歴史と展望』財団法人京都陶磁器協会
- 余語琢磨 2021「石黒宗麿と“京窯”—京都蛇ヶ谷・八瀬における創作活動と生活」『生活学論叢』38
- 余語琢磨 2022「インバウンドとコロナにゆらぐ伝統工芸と観光地—京焼および京都五条坂を事例として」『COVID-19の現状と展望—生活学からの提言』日本生活学会
- レンフルー, C. & バーン, P. 2007『考古学—理論・方法・実践』(池田裕ほか監訳) 東洋書林

本資料や講義のスライドショーの作成にあたっては、共同研究者である立命館大学・木立雅朗氏、さきたま史跡の博物館・ナワビ矢麻氏および早稲田大学・田畑幸嗣氏に、未公表資料を含む3次元画像・映像や関連写真・図版等の提供および使用許可をいただいた。ここに記して感謝したい。また、本講義の内容は、JSPS 科研費の基盤研究 (C)(一般) 課題番号 18K01073「五条坂の窯業考古学的研究—多様性と「伝統」の現在—」(研究代表者: 立命館大学・木立雅朗)、および基盤研究 (C)(一般) 課題番号 22K01102「京焼の産業民俗学的な研究基盤形成—観光開発による産業集積解体に際して—」(研究代表者: 早稲田大学・余語琢磨) の研究成果の一部である。



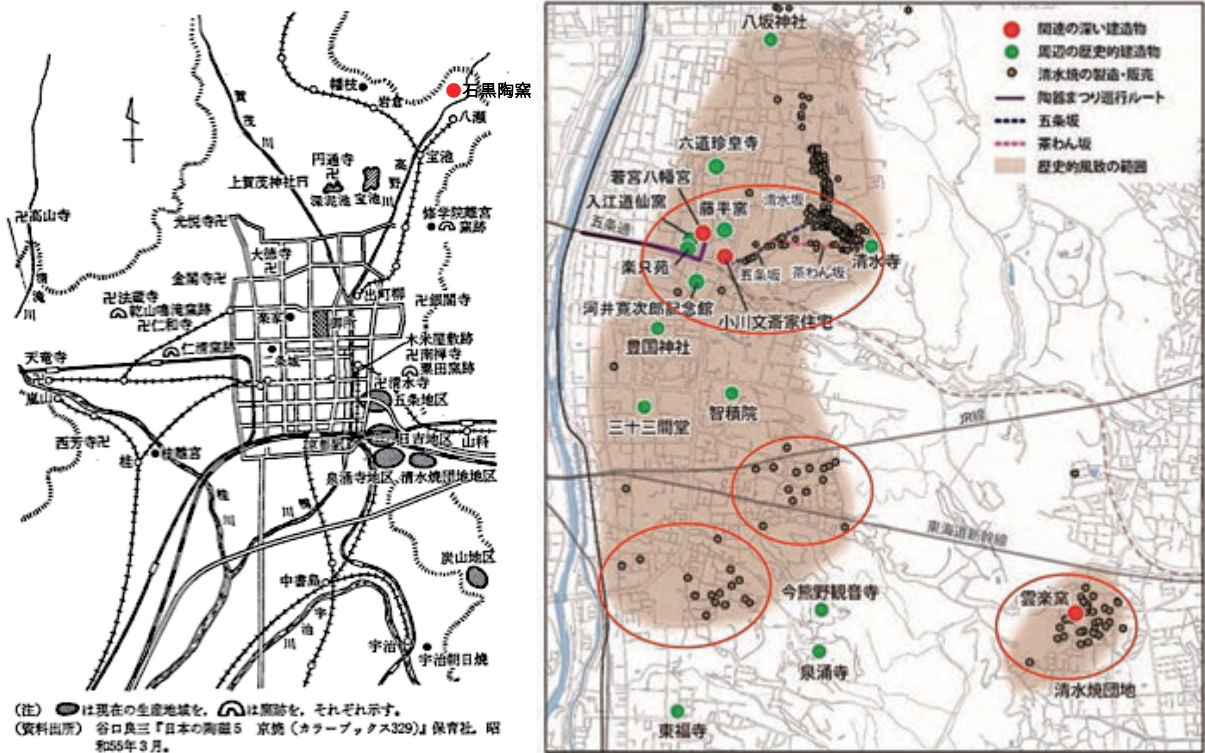


図1 「京焼産地の生産地区・窯跡」および「京焼・清水焼生産地の分布」

(左：柿野欽吾 1983「京都陶磁器業界の歴史と現状」、右：『京都氏歴史的風致維持向上計画(2期)』より改変引用)



図2 近世京焼 (左：野々村仁清、右：尾形乾山・仁阿弥道八)

図3 近代京焼 (左：京薩摩、右：化学磁器・高圧磚子)

(『京焼—みやこの意匠と技』、木立雅朗提供資料、東京工業大学博物館 HP「平野コレクション」より引用)

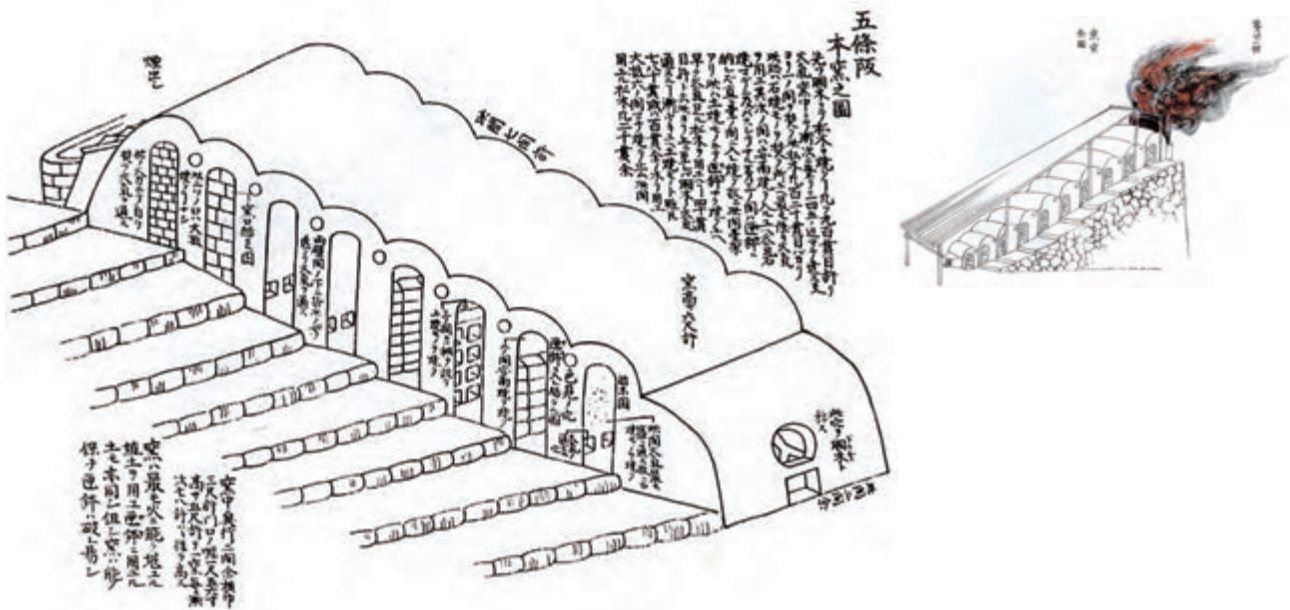


図4 「五條阪 本窯之圖」

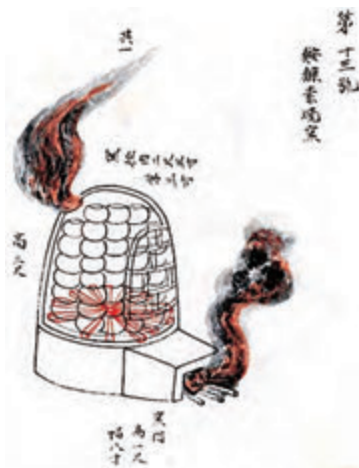


図5 「鮫鯨素焼窯」



図6 サヤ（匣鉢）と棚板による窯詰め



図7 房ごとに焼成が進む

(本ページの図は、すべて『京都陶磁器説并図』より引用)

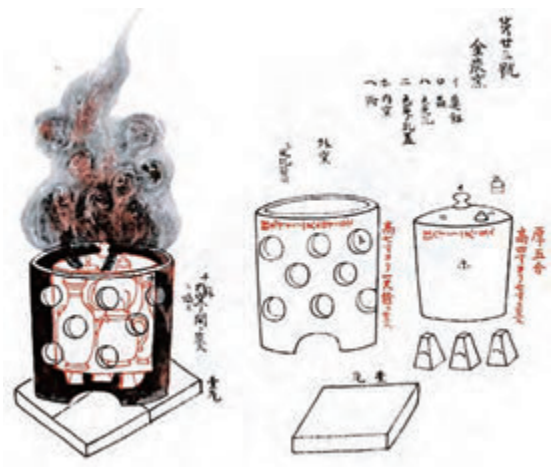


図8 上絵付用錦窯の内窯・外窯と焼成



表 1 地区別に見た京窯数の変遷 (作成途上版)

	栗田口	清水	五条坂	日吉 (蛇ヶ谷)	泉涌寺	京都市 総数
明治 5(1872)年	10	6	15	—	—	35
明治 17(1884)年	10	26		—	—	35
明治 25(1892)年	16	21		—	—	42
明治 40～45 年頃	23	2	14	—	—	40
大正 8(1919)年			24	11	8	67
大正 14(1925)年				11	13	67
昭和 5(1930)年		1	20			77
昭和 29(1954)年	0	0	18	19	16	?
昭和 36(1961)年	0	0	15	25	8	?

明治 5 年資料：京都府『陶磁器説』

明治 17・27 年資料：『京都府勸業統計報告』

明治 40 年～昭和 36 年資料：『京焼百年の歩み』

大正 8 年資料：松林鶴之助 1917-19「濱田先生：登り窯講義」（前崎信也編『大正時代の工芸教育』）

昭和 5 年資料：河井磊三 1930「五条坂に於ける窯の分布」『都市と芸術』205



図 9 昭和 20 年代の五条坂の産業集積

(近代京都オーバーレイマップ「昭和 26 年頃京都市明細図」を改変引用)



図 10 昭和 9 年の「五条坂陶器市」

(藤平長一『五条坂陶工物語』より引用)



図 11 清水焼の売店 (推定：明治期後半)

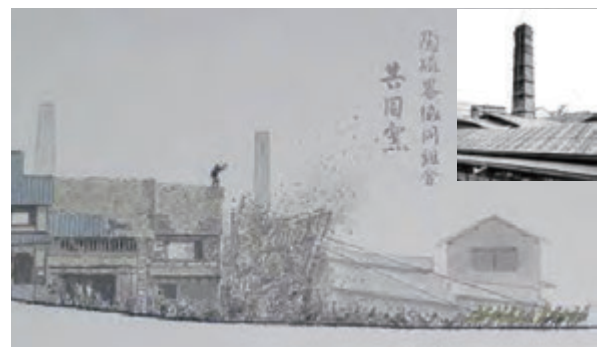


図 12 伊吹弘「五條坂南側町並散華の図」と藤平窯煙突

(図 11：京都陶磁器会館 HP より、図 12：屏風第 3 扇は筆者撮影、藤平窯煙突は京都教委「五条坂京焼登り窯」HP より引用)



図13 五条坂南・河井寛次郎窯の3次元モデル化 (作図：ナワビ矢麻)

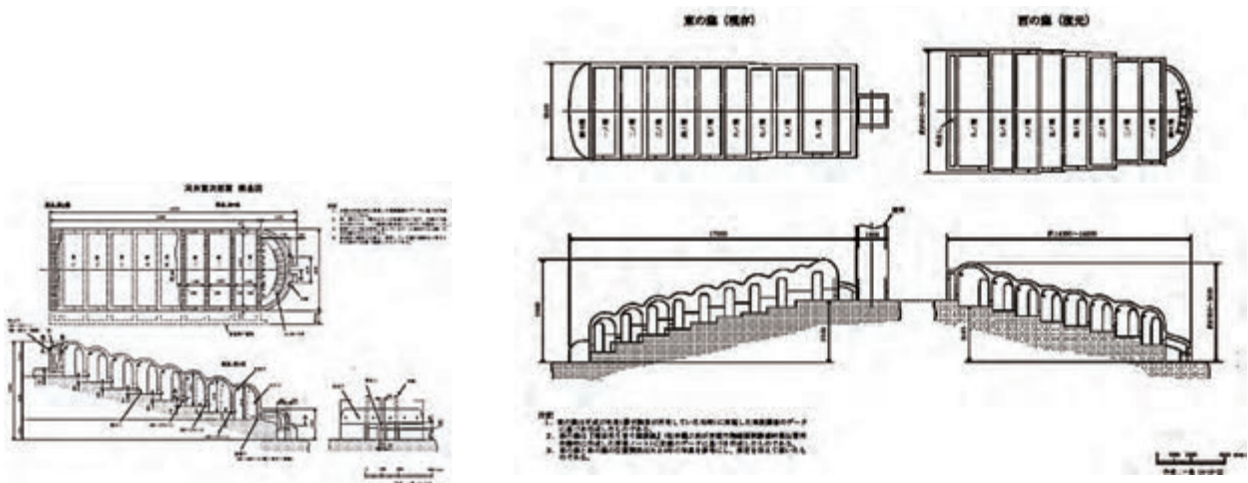


図14 河井寛次郎窯の実測図 (作図：一島政勝)

図15 元藤平窯 (東窯・西窯) 復元図 (作図：一島政勝)

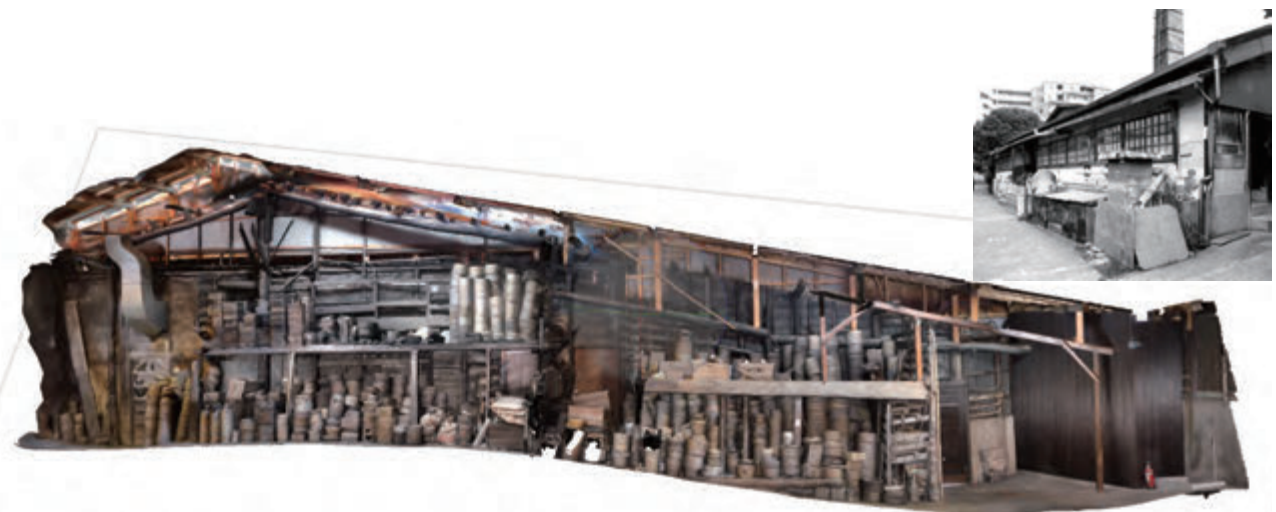


図16 五条坂北・元藤平窯・覆屋北側壁面の3次元モデル化 (作図：木立雅朗、覆い屋写真：南部裕樹)





図 17 石黒陶窯の調査 (左から:「石黒陶窯」石標、木の葉目目の発見、埋もれた胴木間の検出、三次元測量用写真撮影)

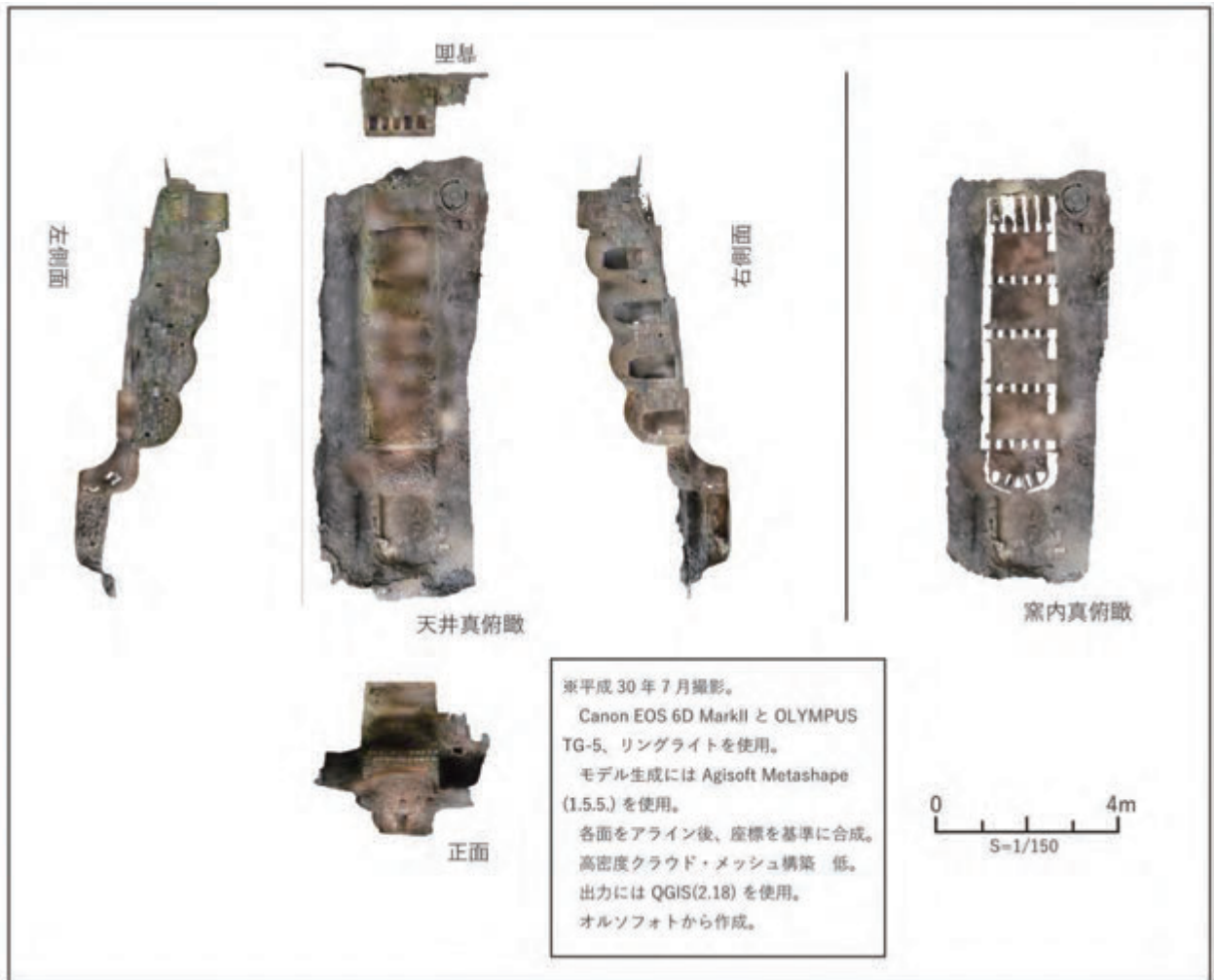


図 18 京都市左京区八瀬「石黒陶窯」・小型京窯の 5 面展開図 (作図: ナワビ矢麻・田畑幸嗣)



図 19 石黒陶窯の古写真 (左から: 覆屋・作業小屋・工房・居宅、居宅前の石黒宗麿、窯と長谷川忠夫。射水市博提供)

◆第4講◆ 京式登り窯のフレキシビリティ

表2 石黒宗麿の京窯年譜

大正 12(1923)年	東京渋谷から埼玉小川町へ転居
大正 14(1925)年	小川町から石川金沢へ転居
昭和 3(1928)年	金沢から京都蛇ヶ谷へ転居 小山富士夫と知り合う
昭和 6(1931)年	大原美術館との関係が始まる
昭和 10(1935)年	佐賀唐津に滞在し、築窯を手伝う
昭和 11(1936)年	京都八瀬に転居、新窯を築く
昭和 18(1943)年	隣地を得て、窯を移設する
昭和 30(1955)年	鉄釉陶器で人間国宝に認定

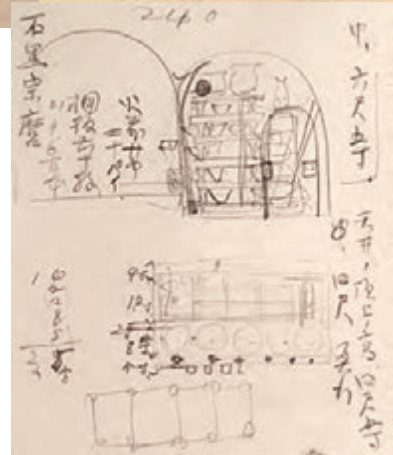


図20 初期の石黒陶窯

(スケッチ 36 部分、射水市博提供)

図21 唐津滞在中の窯スケッチ

(石黒スケッチ 19 部分、射水市博提供)



唐三彩写し (1928-30 年頃)



鈎窯写し (1928 年頃)



柿釉写し (1934 年頃)



李朝刷毛目写し (1934 年頃)



唐津写し (1938-42 年頃)



磁州窯写し (1941 年頃)



赤絵写し (1941 年頃)



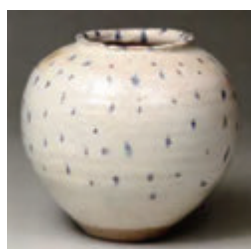
木葉天目写し (1943 年頃)



同左 (50 年目の窯出し)



チョーク釉 (1947 年頃)



藍彩壺 (1943-47 年頃)



鉄絵筒茶碗 (1965 年頃)



黒釉壺 (1958 年頃)

図22 石黒宗麿の作品 (金子賢治『石黒宗麿のすべて』より引用)

## 東国古瓦の文様と技術

### －神奈川県域を中心として－

国士舘大学文学部 教授 眞保 昌弘

#### 1. はじめに

古代瓦の研究には、長い蓄積がある。江戸期の水戸光圀らによる考証、明治・大正期の関野貞による体系的な研究、そして昭和期石田茂作による型式分類と系譜の研究は、今日にも着実に引き継がれることになった。戦後は宮都、寺院、地方官衙において組織的に学術調査が進められ、詳細な出土瓦の分析が行われている。また各地域においても研究会が発足し、瓦の集成も行われ、全国的な研究の高まりと広がりを見せてきている。この間、新たに造瓦組織や製作技術、建物景観の復元などの研究が展開され、これらの進展により、「無用の長物」の代名詞とされてきた瓦礫（ガレキ）が歴史を証明する考古学資料として重要な位置を占めることになった。

ここでは、古代瓦の文様と技術を概観し、東国、そして相模・武蔵国にまたがる神奈川県域の状況および、その特徴についてみていきたい。

#### 2. 古代瓦を読み解く視点

(1) **瓦の種類と名称** 古代瓦は屋根を覆うため様々な種類（形態）の瓦が用いられる。軒先や棟端には蓮花、忍冬、唐草、鬼面などをモチーフにした文様瓦が用いられる。

(2) **文様系譜** 同種の文様瓦が出土する遺跡の分布から、政治性や地域間交流、古墳時代からの結びつきなど歴史的な背景を読みとることができる。

(3) **技術技法** 律令国家の成立と共に宮殿、官衙、寺院が盛んに造営され、大量に瓦が葺かれることになる。これらの瓦から工人の移動や技術交流、技術変化を読み取ることができる。

(4) **建物景観** 全国で発掘調査が進み、屋根に葺かれた状態を復元できる瓦の出土事例が増加する。また、遺跡における出土瓦の位置と数量、瓦の種類から建物景観を読み取ることができる。

(5) **造瓦組織** 宮殿や官衙、寺院などの消費遺跡と瓦窯などの生産遺跡の解明により、瓦工房における運営体制とその変遷、画期を読み取ることができる。また、文字瓦の出土から瓦生産における負担体系も理解することができる。

#### 3. 神奈川県域（相模国・一部武蔵国）の概要

今回取り扱う文様瓦は国分寺造営以前のものとし、5遺跡についてふれたい。

##### (1) 千代廃寺跡（相模国足下郡）

小田原市千代に所在し、標高約30 m、海岸からは約3.5 km、酒匂川左岸の台地上、足柄平野の



東縁にあり、東は森戸川で限られる。千代廃寺は千代遺跡群の中にあり、足下郡衙に比定される下曾我遺跡、「厨」銘墨書土器が出土した千代仲ノ町遺跡、米の出納や僧侶の經典習読を記録する木簡が出土する千代南原遺跡が隣接する。伽藍配置は明らかではないが、礎石の残存状況等から東面する法隆寺式伽藍との指摘もある。

出土する鏡瓦は、三重圏文複弁10葉蓮花文2種、三重圏文複弁16葉蓮花文2種と重弧文字瓦がある。複弁10葉は花卉が整うものと一部花卉が乱れるものがある。複弁16葉は花卉が細弁化するもので、中房が突出するものとしめないものがある。突出しないタイプに「大伴五十戸」と刻書された鏡瓦がある。「大伴」は郷名、「五十戸」（サト）は飛鳥浄御原令の編纂を契機に「里」（サト）への変化がうかがわれる律令末端行政組織で、足上郡伴部郷の前身と考えられている。

## (2) 横須賀市宗元寺跡（相模国御浦郡）

横須賀市公郷町3丁目にあり、北と西は丘陵に囲まれ、東は横須賀高校、南には平作川支流の宇東川が丘陵裾を西流している。北方の山腹にある曹源寺から南にのびる参道の東西は緩やかに傾斜し、およそ100m四方で瓦が採集され、寺院跡の存在が考えられる。さらにその南には東海道が東西に走るものと考えられる。

4葉忍冬交飾蓮花文鏡瓦は4種以上あり、型挽重弧文が出土する。素縁の4弁4忍冬文には、中心蓮子が環状で弁端弁間に珠文をもち、弁中央に稜をもつものがあり、大和西安寺と同範関係とされている。この瓦を祖型として文様の変遷がうかがえ、4弁5忍冬や環状中心蓮子や珠文・弁中央の綾喪失、忍冬文の突出化などが読み取れる。

## (3) 深田廃寺跡（相模国御浦郡）

横須賀市深田台にあり、東方に東京湾をのぞむ現在の市立文化会館と同博物館周辺の東側山腹から瓦を多く出土する。海軍病院建設により破壊され、遺跡の性格は不明である。大正12年の震災による病院消失後、2種類の瓦群が発見されることから窯跡とは考えられず、寺院の可能性が考えられている。鏡瓦は2種類あり、1種は、素弁6葉蓮花文で、盛り上がる花卉中央には中房から花卉端部まで稜がみられる。間弁は大きく銀杏型となる。もう1種は、素弁8葉蓮花文で、平坦な中房が十字凸線で区画される。尖り気味の花卉中央に稜をもつ、大きな間弁は端部でよく盛り上がる。

## (4) 千葉地廃寺跡（相模国鎌倉郡）

鎌倉市御成町にあり、由比ヶ浜の海岸から約1.3km、滑川の右岸にあり、標高は8.5m、瓦の出土範囲は、南の鎌倉郡衙（今小路西遺跡）付近から、北は千葉地遺跡、東は千葉地東遺跡、西は御成山裾まで、南北400m、東西300mの範囲に及ぶ。千葉地廃寺としてとらえられ、多くの瓦が出土している。鏡瓦としては、三重圏文素弁6葉蓮花文鏡瓦がある。花卉端部は反転し、間弁は大きな楔型となる。接合法は印籠付け、男瓦凹面には小札痕跡をもつ。

## (5) 影向寺跡（武蔵国橋樹郡）

川崎市高津区野川にあり、多摩川右岸の標高約40mの台地上に立地する。野川、新作、梶ヶ谷、末長、馬絹などの台地上の平坦部には西福寺古墳や馬絹古墳など大小の高塚古墳が群集して造営される。

昭和 52 (1977) 年からの調査で基壇や掘立柱建物跡が確認される。塔基壇は推定 12m 四方の版築がみられ、影向石と呼ばれる塔心礎上面には二重の舍利孔が穿たれるなど三重塔である可能性が高い。また金堂は現在薬師堂が建っている地点と考えられ、東西 20m 以上、南北 15m 以上の東西棟となり、法起寺式伽藍配置をとるものと推定されている。鐙瓦は、いわゆる棒状子葉となる単弁 8 葉蓮花文鐙瓦で内区外縁の線鋸歯文が巡り、面径の大小で 2 種類、そのほか素文縁で 1 種類、計 3 種の創建期の瓦がある。宇瓦は重弧文の 5、4、3 重弧 3 種で型挽重弧文字瓦となる。塔基壇内には瓦が含まれ、金堂より遅れて造営されたことがわかる。また、線鋸歯文から素文への変遷がうかがえる。金堂西側の 8 世紀中葉前後の建物である第 4 号掘立柱建物跡の柱穴底部から「无射志国荏原評」の文字瓦が柱受けとして出土している。瓦の製作年代は国評名の併記から国名が表記され始める天武 12 (683) 年以降、大宝元 (701) 年の律令国郡制以前のものと考えられる。

## 4. おわりに 東国古瓦の中での位置づけ

### (1) 寺院造営と神奈川県域の国造・別の 4 領域

古墳時代における神奈川県域には、相武国造・師長国造・鎌倉別・無邪史もしくは胸刺国造の設置が『国造本紀』や『古事記』から考えられている。

相武国造(さがむ)は、高座郡(こうざ)愛甲郡(あいこう)を中心とした相模川流域に、師長国造(しなが)は、余綾郡(よろぎ)を中心とした神奈川県西部に比定される。『国造本紀』には相模国東部域の国造はみられないが、『古事記』に国造と並び、地方に封ぜられた「別」として鎌倉別(かまくらわけ)の存在がうかがえ、東部域の鎌倉郡・三浦郡域には「鎌倉別」をあてる考えが有力である。また、現在の川崎市、横浜市域は武蔵国の久良岐・橘樹・都築 3 郡に比定され、武蔵国域に設置されていた無邪史・胸刺・知々夫 3 国造のうちの知々夫を除く、どちらかの国造に関わる可能性がある。神奈川県域での寺院造営地と文様瓦の系譜の相違からは、これらの「国造」や「別」などの前代の勢力圏・地域圏を反映している可能性があり、このことについては、すでに田尾氏が文献 29 で示されている。また、御浦郡の宗元寺と深田廃寺は隣接して 2 寺院(遺跡)が認められ、交通の要衝との関わりなど他地域とは異なる状況を示している。相模国分寺の造営以降には、供給瓦窯が広範囲に見られると共に、瓦の文様も共通性が見られる可能性がある。

### (2) 瓦の系譜から見た武蔵国域(東山道)と相模国域(東海道)の比較

武蔵国では、上野国(群馬県域)系譜の造瓦の影響がみえ、下野国と共に陸奥国へも強い影響を与えている。相模国域では駿河国との一部関わりが見えるものの上総、下総国など隣国との関連は強くうかがえない。東山道・東海道の坂東の入り口にある両国両道の違いは興味深い。

### (3) 影向寺の成立と周辺地域との関わり

川崎市影向寺は武蔵国橘樹郡に所在する。橘樹郡は、いわゆる「武蔵国造の乱」において屯倉が設置された「横渟、橘花、多氷、倉櫟」の「橘花」に比定される。また、横渟が「横見」、多氷が「多磨」、倉櫟が「久良岐」の各郡とすると「横見」が現在の埼玉県東松山市、吉見町、それ以外は神奈

川流域でありながら武蔵国となる地域を含む多摩川下流域となる。影向寺から出土する鏡瓦への北武蔵系「棒状子葉」の採用、荏原評銘瓦の出土、さらに影向寺系譜と考える鋸歯文縁鏡瓦の多磨寺での採用など、これらの地域間における歴史的背景を物語る可能性がある。

※ここでは歴史的な名称を用い、それぞれ鏡瓦（軒丸瓦）、宇瓦（軒平瓦）、男瓦（丸瓦）、女瓦（平瓦）としている。

#### 引用参考文献

- 1 赤星直忠 赤星ノート 宗元寺関係
- 2 赤星直忠 1935「相模宗元寺址」『史跡名勝天然記念物調査報告書』第3輯
- 3 大川清 1966『かわらの美-埋れた日本古代史-』
- 4 奈良国立博物館編 1970『飛鳥白鳳の古瓦』
- 5 神奈川県 1981『神奈川県史』通史編1
- 6 大川清 1983『古代窯業の実験研究(1)』
- 7 上原真人 1984「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』3
- 8 神奈川県立博物館 1984『神奈川の古瓦』-国分寺から西洋館まで-
- 9 河野一也・國平健三 1988「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅰ)」-相模国鎌倉郡の古瓦を中心として-『神奈川考古』第24号
- 10 河野一也 1990「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅱ)」-相模国宗元寺の古瓦について-『神奈川考古』第26号
- 11 河野一也 1991「相模国」『関東の初期寺院を考える』関東古瓦研究会
- 12 河野一也・山下守昭 1991「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅲ)」-相模国高座郡下寺尾廃寺の古瓦について-『神奈川考古』第27号
- 13 昼間孝志 1991「武蔵国」『関東の初期寺院を考える』関東古瓦研究会
- 14 河野一也 1993「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅳ)」-相模国足下郡千代廃寺の古瓦を中心として-『神奈川考古』第29号
- 15 岡本東三 1996『東国の古代寺院と瓦』
- 16 上原真人 1997『歴史発掘11 瓦を読む』
- 17 神奈川県考古学会 2000『かながわの古代寺院』・
- 18 岡本孝之 2000『『かながわの古代寺院』を終えて』考古かながわ第18号
- 19 神奈川県考古学会 2001『かながわの古代寺院』-研究の成果と課題-
- 20 竹澤嘉範 2001「瓦から読む古代の宗元寺」『古代寺院 宗元寺』赤星直忠博士文化財資料館
- 21 竹澤嘉範 2001「深田廃寺跡」『古代寺院 宗元寺』赤星直忠博士文化財資料館
- 22 静岡県教育委員会 2003『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
- 23 大橋泰夫 2004「瓦類」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺構・遺跡編』奈良文化財研究所
- 24 神奈川県立歴史博物館 2008 特別展『瓦が語る かながわの古代寺院』
- 25 山路直充 2009「大伴五十戸」と記銘された軒丸瓦『駿台史学』137号
- 26 山崎信二 2011『古代造瓦史-東アジアと日本-』
- 27 酒井清治 2014「埼玉県寺谷廃寺から勝呂廃寺への変遷」-素弁軒丸瓦から棒状子葉軒丸瓦へ-『駒沢史学』82号
- 28 眞保昌弘 2015『古代国家形成期の東国』
- 29 田尾誠敏 2017「相模国における官衙・初期寺院の景観とその形成」『古代東国の地方官衙と寺院』
- 30 栗田一生 2017「武蔵国橘樹郡家と影向寺遺跡」『古代東国の地方官衙と寺院』
- 31 有吉重蔵 2018『古瓦の考古学』
- 32 府中市 2021『新府中市史』原始・古代 資料編3 考古資料2



令和4年度 考古学ゼミナール

テーマ「技術」から過去をさぐる

## 東国古瓦の文様と技術

—神奈川県域を中心として—

2022年11月5日（土）  
14時～

国土舘大学 眞保昌弘

1. はじめに

2. 古代瓦を読み解く視点

- (1) 瓦の種類と名称
- (2) 文様系譜
- (3) 技術技法
- (4) 建物景観
- (5) 造瓦組織

3. 神奈川県域（相模国と一部武蔵国）の様相

- (1) 千代廃寺跡（小田原市）
- (2) 宗元寺（横須賀市）
- (3) 深田廃寺跡（横須賀市）
- (4) 千葉地遺跡 千葉地東遺跡（鎌倉市）
- (5) 影向寺（川崎市）

4. おわりに 東国古瓦の中での位置づけ

今日の項目

## 瓦の種類と名称

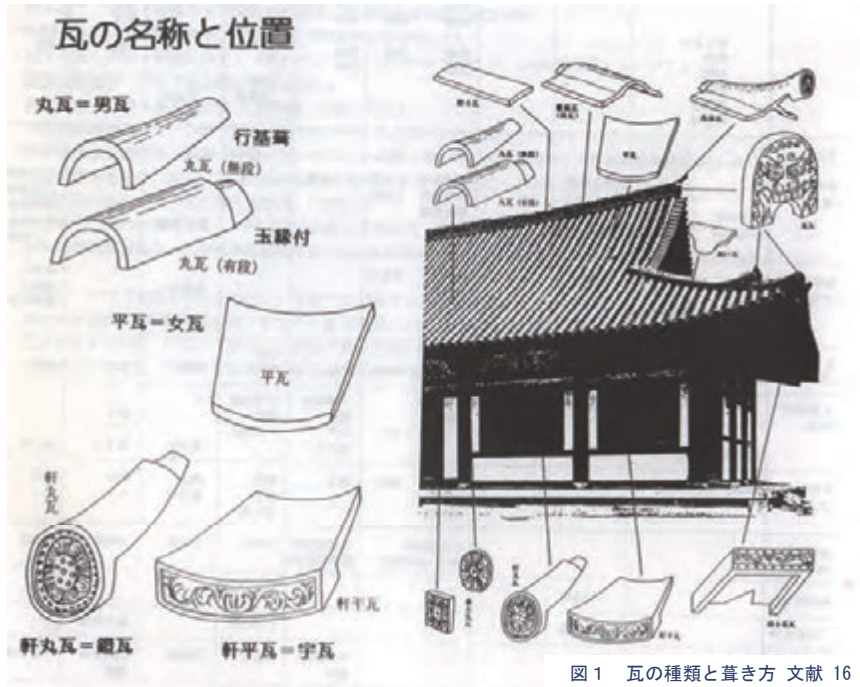


図1 瓦の種類と葺き方 文献 16



図2 鍔瓦の文様区分 文献 26



図3 鍔瓦文様帯の変遷 文献 15



図4 鍔瓦細部の名称 文献 4



図5 宇瓦細部の名称 文献 4

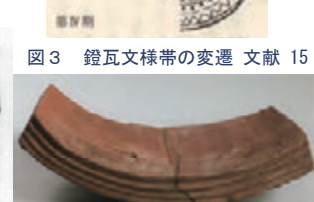


図6 重弧文字瓦 文献24

## 文様系譜



図7 山田寺式の分布 文献 15



図8 川原寺式の分布 文献 15

## 技術技法



図9 『天工開物』(明末)に見る瓦作り



図10 瓦作りの復元 文献 8

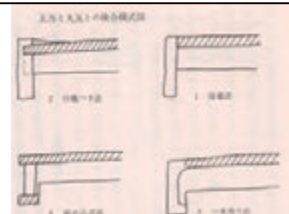
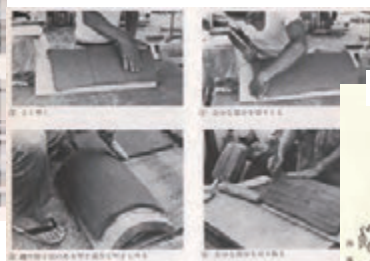


図11 鍍瓦の接合法 文献 4

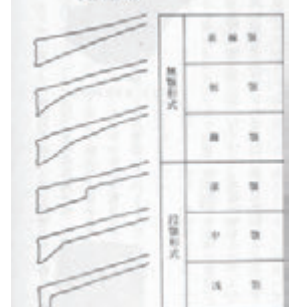


図12 宇瓦の断面形態 文献 4

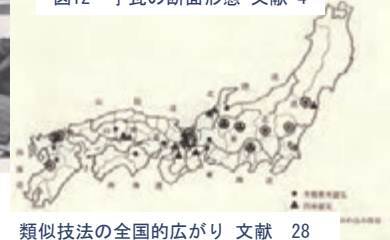


図13 類似技法の全国的広がり 文献 28



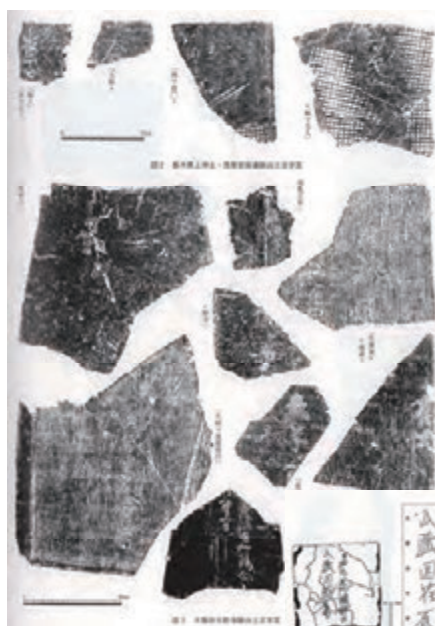
## 建物景観



図14 瓦の出土状況 文献 23

図15 屋根景観の復元 文献 23

## 造瓦組織



神奈川県域（相模国と一部武蔵国）の様相



図18 相模の初期寺院 文献 11



図20 相模の文様瓦 文献 19



図19 相模の初期寺院と鍍瓦 文献 11

千代廃寺跡（小田原市）・からさわ瓦窯跡（松田町）

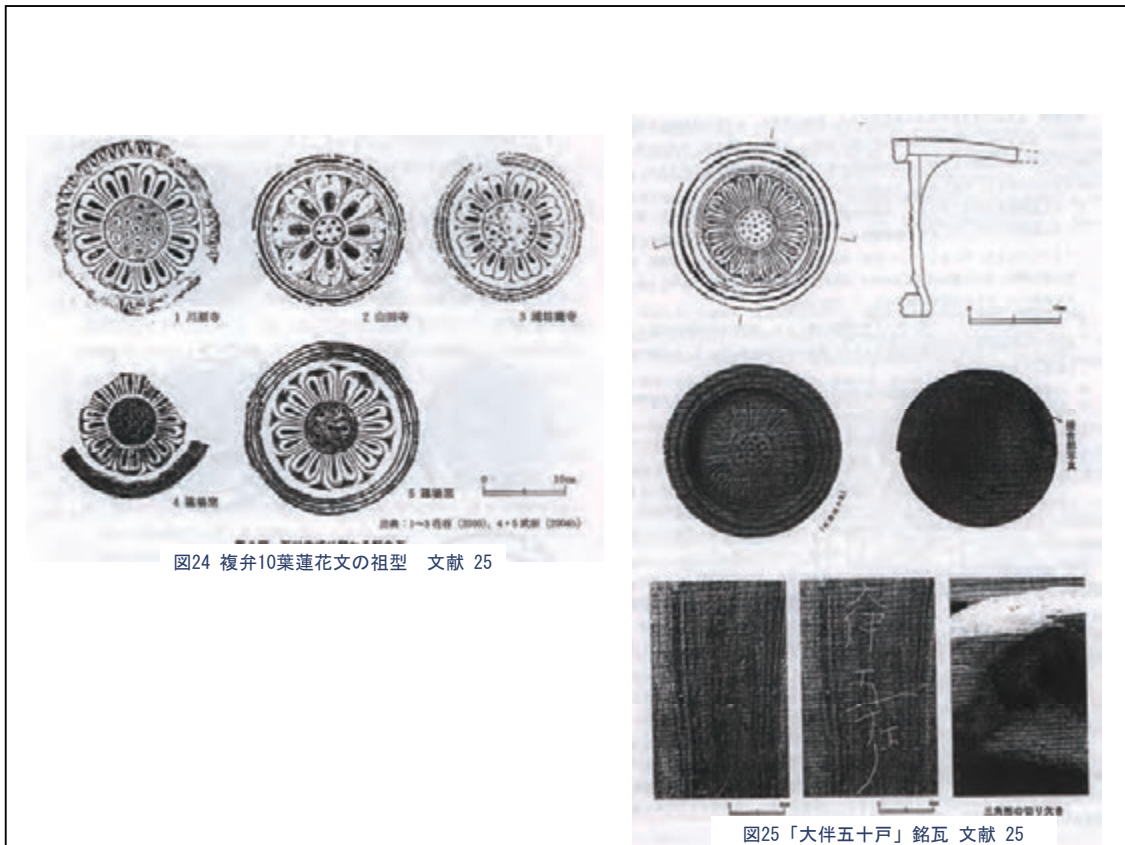
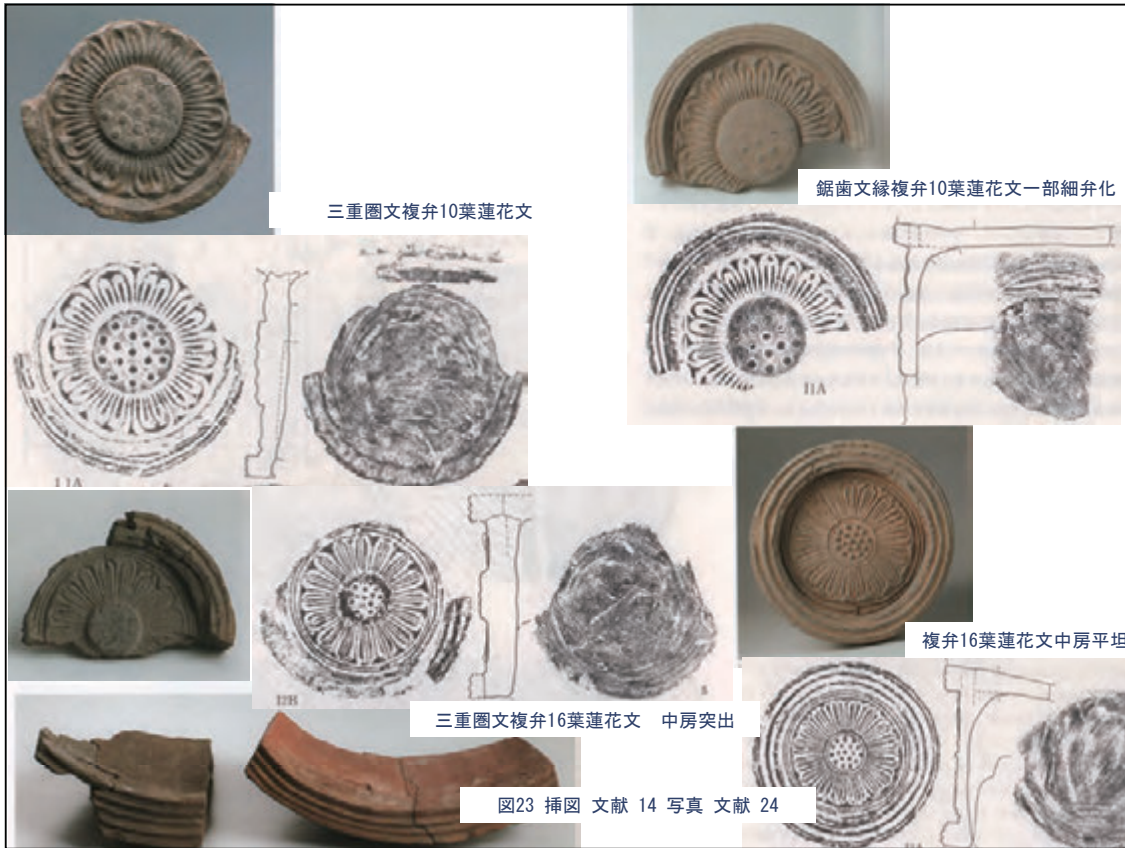


図21 千代廃寺と周辺遺跡 文献 11



図22 千代廃寺周辺の調査地点 文献 11







千葉地遺跡・千葉地東遺跡（鎌倉市）



図26 千葉地遺跡と周辺遺跡 文献 11

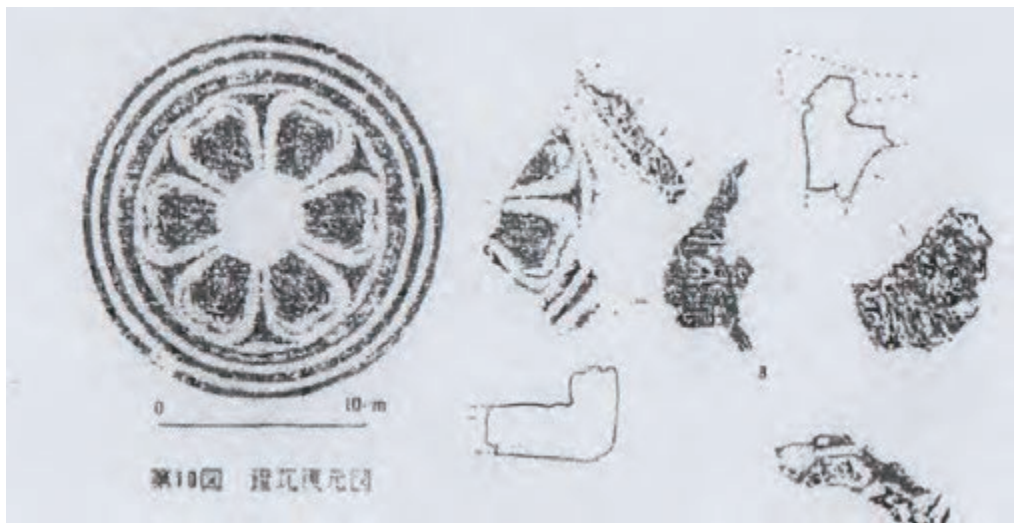


図27 三重圈文素弁6葉蓮花文鏡瓦と復元案 文献 17

宗元寺（横須賀市）



図28 宗元寺・深田麩寺と周辺遺跡 文献 11



図29 宗元寺想定配置図 文献 29

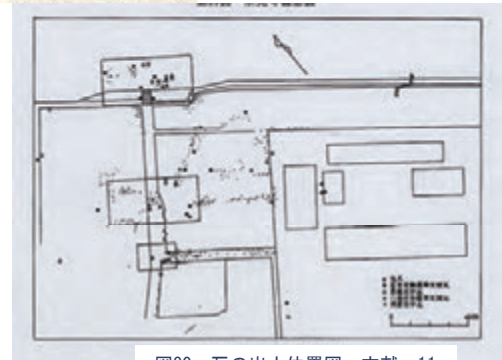


図30 瓦の出土位置図 文献 11



図31 挿図 文献 11 写真 文献 24



### 深田廃寺跡（横須賀市）

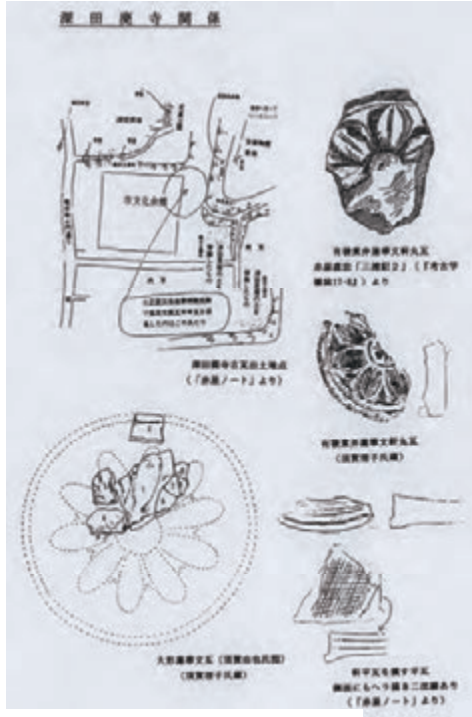


図33 深田廃寺と周辺遺跡 文献 19



図32 深田廃寺出土瓦 文献 21

### 影向寺（川崎市）



図34 影向寺遺跡全体図 文献 30



図35 橋樹官街遺跡群全体図 文献 30



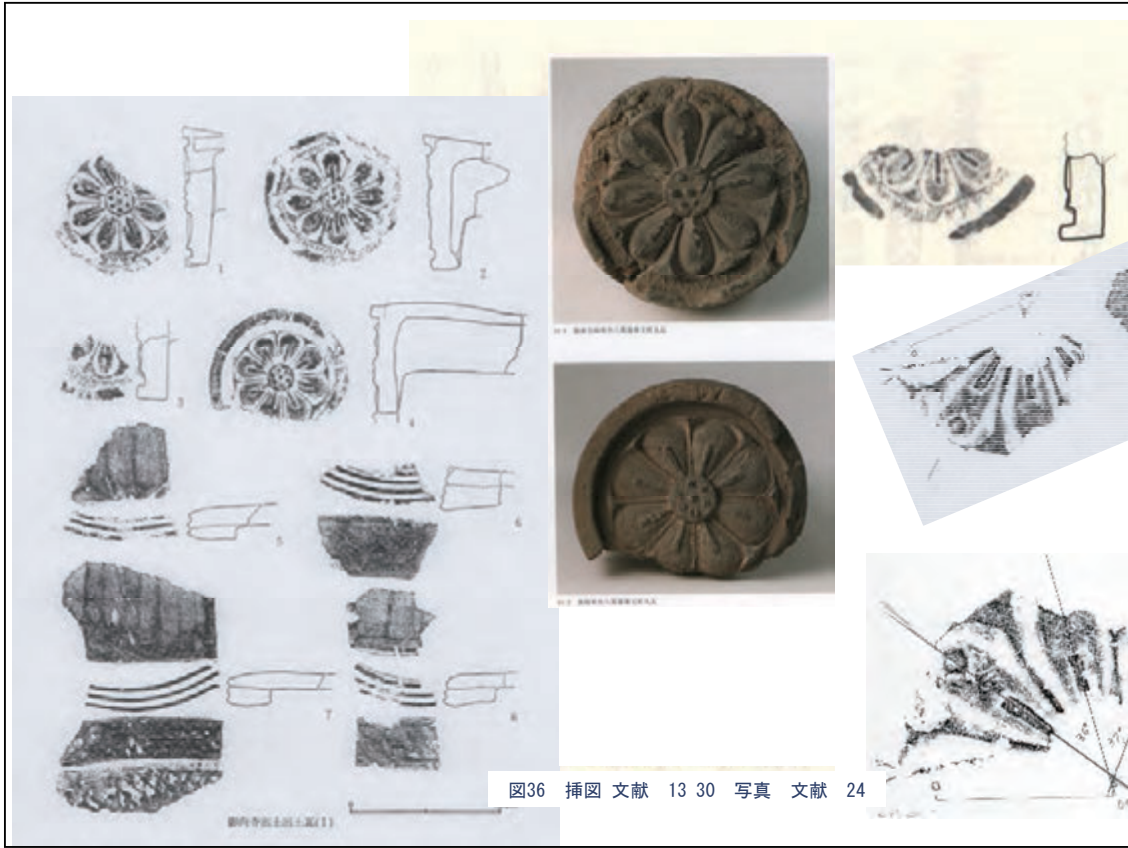


図36 挿図 文献 13 30 写真 文献 24

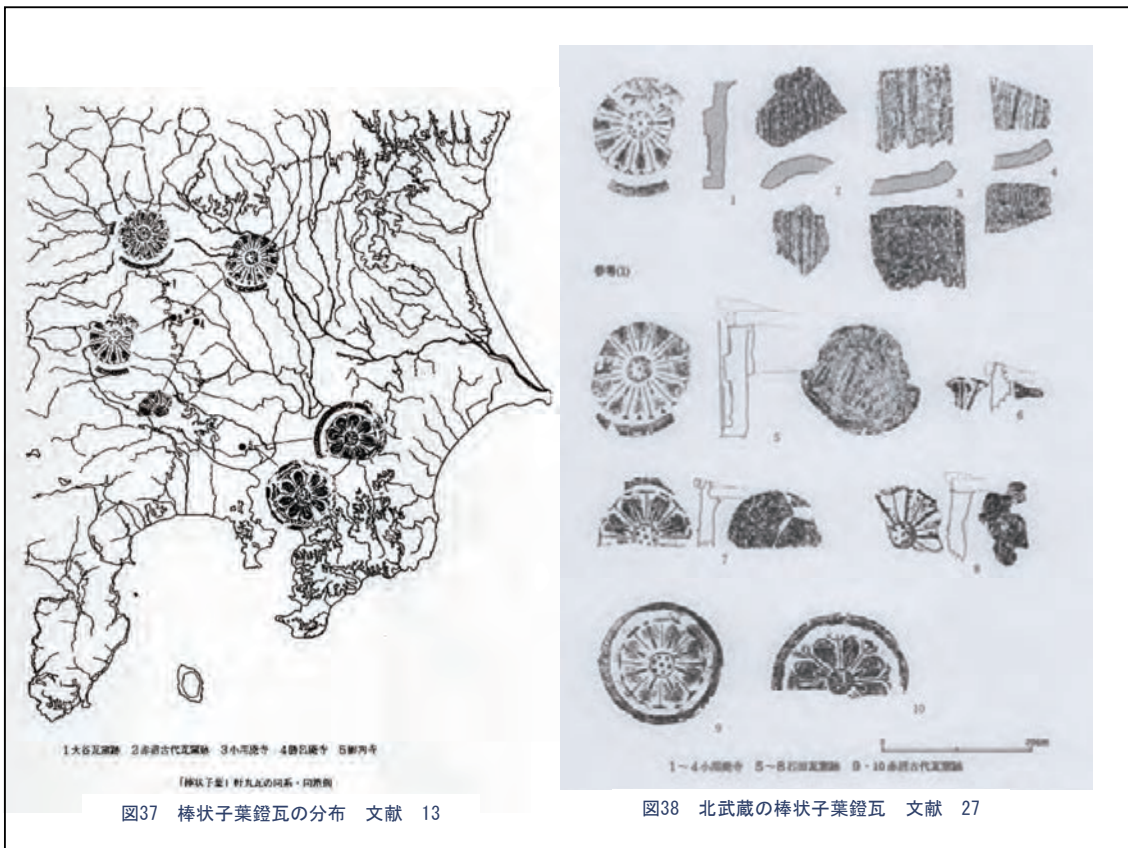
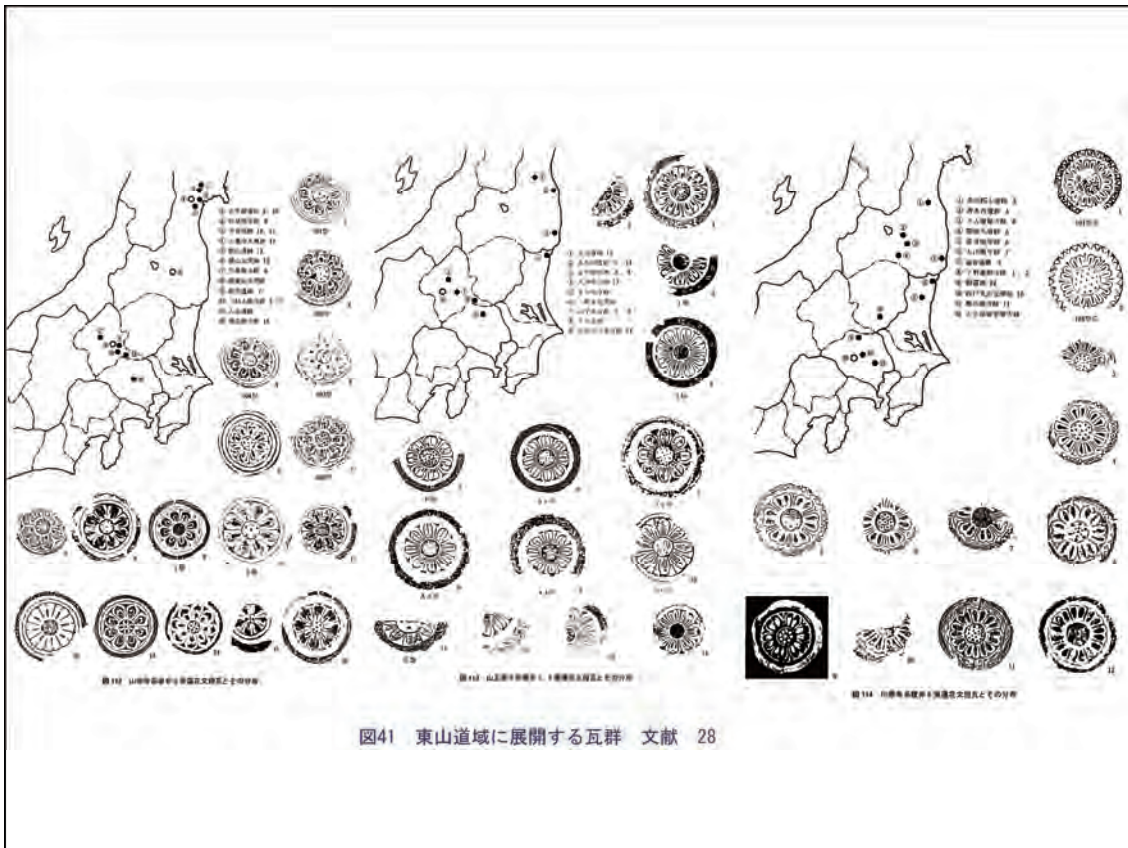


図37 棒状子葉鍔瓦の分布 文献 13

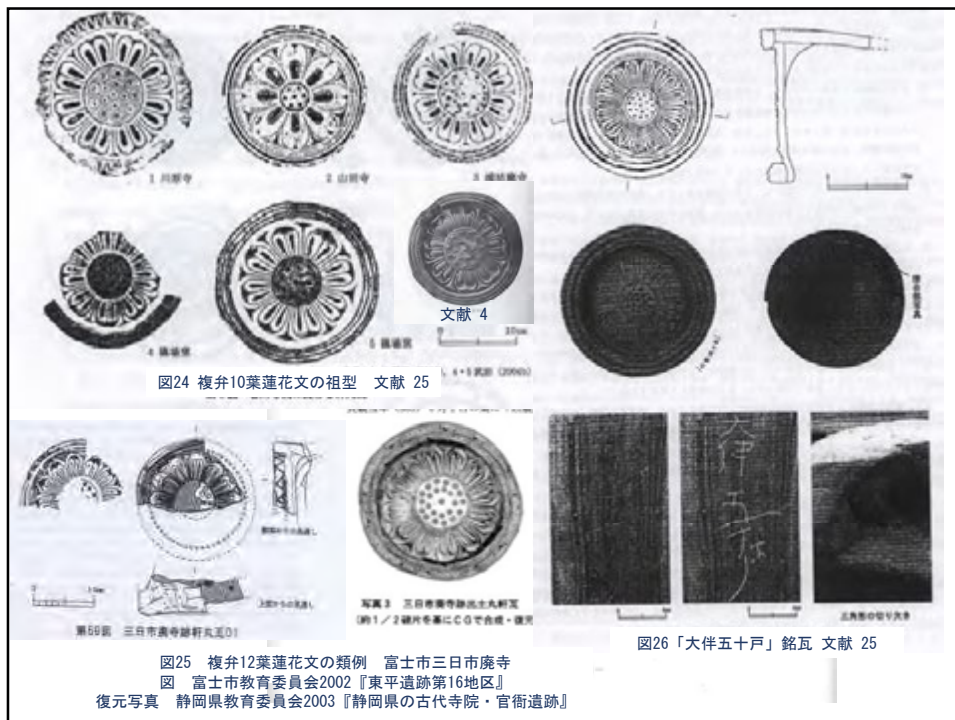
図38 北武蔵の棒状子葉鍔瓦 文献 27

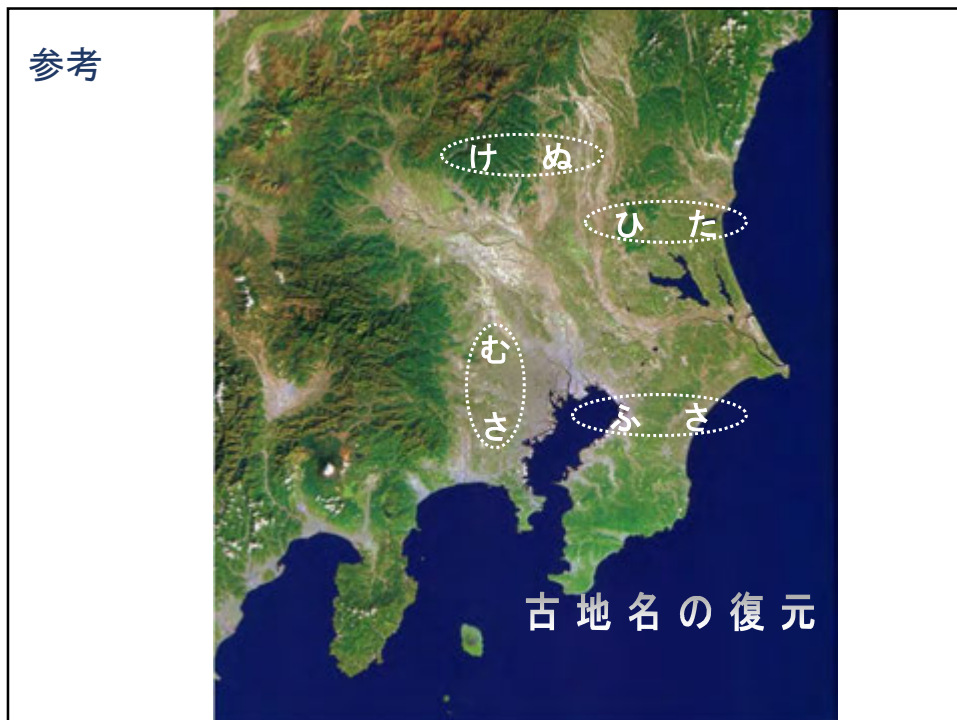


















令和4年度 考古学ゼミナール  
「技術」から過去をさぐる

発行日 令和4(2022)年10月15日

編集・発行

神奈川県教育委員会 生涯学習部 文化遺産課 中村町駐在事務所  
(神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

電話:045-252-8661(平日9時~17時)

Fax:045-252-8663



埋文センターHP